

大阪市住吉区

荻田9丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪府営荻田住宅建替建設工事に伴う発掘調査報告書

2009.3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市住吉区

荻田 9 丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪府営荻田住宅建替建設工事に伴う発掘調査報告書

2009.3

財団法人 大阪市文化財協会



1 区 平安時代以前の遺構(北から)

大阪市住吉区

菟田 9 丁目所在遺跡発掘調査報告

大阪府営菟田住宅建替建設工事に伴う発掘調査報告書

2009.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は住吉区荻田9丁目所在遺跡における初めての発掘調査の報告書である。住吉の地は住吉大社、依網池などの歴史的な名辞を多く有し、大阪にとって古代から重要な地域であった。実際の発掘調査においても山之内遺跡・遠里小野遺跡・南住吉遺跡・住吉大社境内遺跡などで、全国的にみても重要な成果があがっている。また、荻田の地でも近年、荻田4丁目所在遺跡において中世鋳物師関連の遺構・遺物が発見されている。

今回の調査結果は内容的にみれば、遺構・遺物ともに華やかなものとは決していえないが、当時の土地利用の実態を解明する上で重要な成果となるであろう。当遺跡の調査は緒についたばかりであり、今後の調査の進展によって、遺跡の実態や周辺遺跡との関係が明らかになっていくものと確信する。

最後に、発掘調査の進行から報告書刊行にいたるまで、数々のご理解とご協力を賜った大末建設株式会社をはじめとする関係各位に深謝の意を表したい。

2009年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が大末建設株式会社の委託を受け、2008年5月12日～7月25日に住吉区荻田9丁目で実施した大阪府営荻田住宅建替建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(KQ08-1次、KQは荻田9丁目所在遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大末建設株式会社の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部次長南秀雄の指揮のもとで同部学芸員平田洋司が担当した。調査の期間・面積は第Ⅱ章に示す。
- 一、本書の執筆および編集は、南、長原調査事務所長趙哲済の指揮のもと、平田が行った。本書の用字用語や体裁等の調整は、文化財研究部技術管理担当課長田中清美ほか、趙、同部事業企画課担当課長代理清水和明、同部事業担当係長佐藤隆らの報告書校正委員が行った。
- 一、基準点測量および空中写真測量は株式会社かんこうに委託した。
- 一、遺構写真は平田が撮影し、遺物写真の撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には、多くの補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語、および断面図に示した岩相のパターンは、[趙哲済1995]に準じる。
2. 本書における地層名は第○層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとって○層とのみ示し、調査地の地層名と区別する。
3. 遺構名の表記は、溝(SD)、土壌(SK)、その他(SX)の分類記号の後に、3桁の番号を付した。百の位は検出した調査区名を示し、十の位以下は各調査区における遺構ごとの通し番号を示す。例えば、SK301は3区で検出した土壌1となる。
4. 本書における遺物番号は、すべて1からの通し番号を付した。
5. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づく。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では $TP \pm \bigcirc$ mと記した。また、挿図中の方位は図1が真北である以外はすべて座標北を使用した。
6. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄1967]に拠った。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と周辺の調査	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境と周辺の調査	3
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査の経過	8
第Ⅲ章 調査の結果	9
第1節 層序	9
第2節 平安時代以前の遺構と遺物	14
1) 1区	14
i) 落込み	ii) 溝
iii) 土塋	iv) 倒木痕・根痕
2) 2区	21
i) 落込み	ii) 溝
iii) 土塋	iv) 倒木痕・根痕
3) 3区	25
i) 落込み	ii) 倒木痕・根痕
4) 平安時代以前の土地利用について	27
第3節 鎌倉～室町時代の遺構と遺物	29
1) 第3層段階の遺構と遺物	29
i) 1区	ii) 2区
iii) 3区	
2) 第2層段階の遺構と遺物	34
i) 1区	ii) 2区
iii) 3区	
3) 鎌倉～室町時代の土地利用について	35

第4節 江戸時代以降の遺構と遺物	36
1) 1区	36
i) 土壙	
ii) 小溝群・溝	
2) 2区	39
3) 3区	39
4) 江戸時代以降の土地利用について	40
第IV章 調査成果のまとめ	41
引用・参考文献	45
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

図 版 目 次

- 1 調査地全景・地層断面
 - 上：調査地全景(南西から)
 - 中：1区 北壁地層断面(南西から)
 - 下：2区 北壁地層断面(中央付近・南西から)
- 2 平安時代以前の遺構(一)
 - 上：1区 第3層基底面・第5層上面の状況(北から)
 - 中：1区 第3層基底面・第5層上面の状況(南から)
 - 下：1区 SD101(北から)
- 3 平安時代以前の遺構(二)
 - 上：1区 SD103・104(北から)
 - 中：1区 SK101(西から)
 - 下：1区 SX103・104(北から)
- 4 平安時代以前の遺構(三)
 - 上：1区 SX111(東から)
 - 中：1区 SX113(南西から)
 - 下：2区 第3層基底面・第5層上面の状況(西から)
- 5 平安時代以前の遺構(四)
 - 上：2区 SX201(北東から)
 - 中：2区 SD201(南東から)
 - 下：2区 SX204(南東から)
- 6 平安時代以前の遺構(五)
 - 上：2区 SX207(北西から)
 - 中：3区 第0層基底面・第5層上面の状況(西から)
 - 下：3区 SX301・302(北東から)
- 7 鎌倉～室町時代の遺構(一)
 - 上：1区 第3層下面の状況(北から)
 - 中：2区 第3層下面の状況(西から)
 - 下：1区 第1層下面・基底面の状況(北から)
- 8 鎌倉～室町時代の遺構(二)
 - 上：1区 第1層下面・基底面の状況(北東から)
 - 中：2区 第2層下面の状況(西から)
 - 下：2区 第2層下面小溝群(西から)
- 9 江戸時代以降の遺構
 - 上：1区 SK104(南から)
 - 中：2区 第1層下面の状況(西から)
 - 下：2区 第1層下面小溝群(北西から)
- 10 出土遺物

挿 図 目 次

図 1	苅田 9 丁目所在遺跡の位置	1	図17	2 区第 3 層基底面・第 5 層上面の遺構	22
図 2	苅田 9 丁目所在遺跡と周辺の遺跡	1	図18	SD201出土遺物	23
図 3	遺跡の立地と周辺の地形分類	2	図19	2 区倒木痕・根痕断面図	24
図 4	近代の調査地周辺図	4	図20	3 区第 0 層基底面・第 5 層上面の遺構	26
図 5	苅田 4 丁目所在遺跡の遺構	6	図21	3 区第 0 層基底面・第 5 層上面の遺構断面図	27
図 6	調査地位置図	7	図22	1・2 区出土遺物	29
図 7	調査区配置図	7	図23	1 区第 3 層下面の遺構	30
図 8	断面図の位置	9	図24	1 区第 3 層下面の遺構	31
図 9	1 区地層断面図	10	図25	1 区第 1 層基底面の遺構	32
図10	2 区地層断面図	11	図26	2 区第 2 層下面の遺構	33
図11	3 区地層断面図	12	図27	1 区第 1 層下面の遺構	37
図12	SX101、SX114・115周辺遺構検出作業中 出土遺物	14	図28	2 区第 1 層下面の遺構	38
図13	1 区第 3 層基底面・第 5 層上面の遺構	15	図29	SK104・105断面図	39
図14	SD101～104・SK101断面図	16	図30	SK104・SD106出土遺物	37
図15	1 区倒木痕・根痕断面図(1)	18	図31	調査地の変遷	42・43
図16	1 区倒木痕・根痕断面図(2)	19			

写 真 目 次

写真 1	1 区調査風景	8	写真 2	1 区深掘り部の状況	13
------	---------	---	------	------------	----

第Ⅰ章 遺跡の立地と周辺の調査

第1節 遺跡の立地

苅田9丁目所在遺跡は、大阪市住吉区の東南部に位置する(図1)。西を山之内遺跡、南を依網池跡の両遺跡に接し、東西・南北ともに約0.4kmが中世の集落跡として遺跡の指定範囲となっている(図2)。しかし、当遺跡では、これまで小規模な試掘調査が実施されたのみで、遺跡の実態については不明な部分が多く残されている。

地形的には、大阪市内を南から北に張出す上町台地の東側縁辺部に位置する(図3)。遺跡の東側には狭山池から流れを発する西除川の旧河道があり、南北方向に自然堤防を形成している。また、東北にはこの自然堤防から

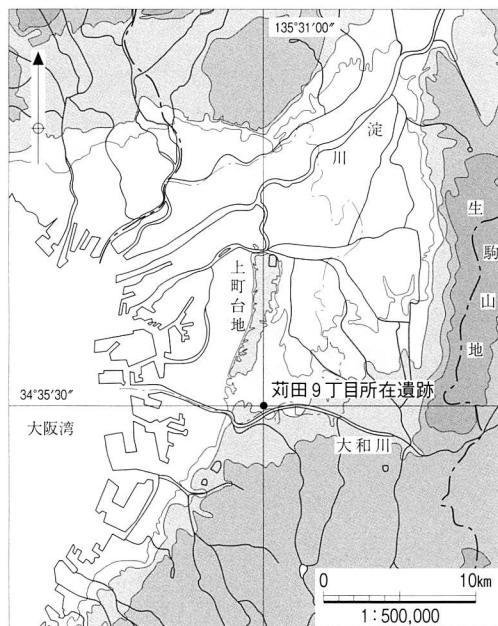


図1 苅田9丁目所在遺跡の位置



図2 苅田9丁目所在遺跡と周辺の遺跡

(遺跡範囲は大阪府地図情報システム上の「文化財情報」[大阪府教育委員会(平成19年9月作成)]を利用)

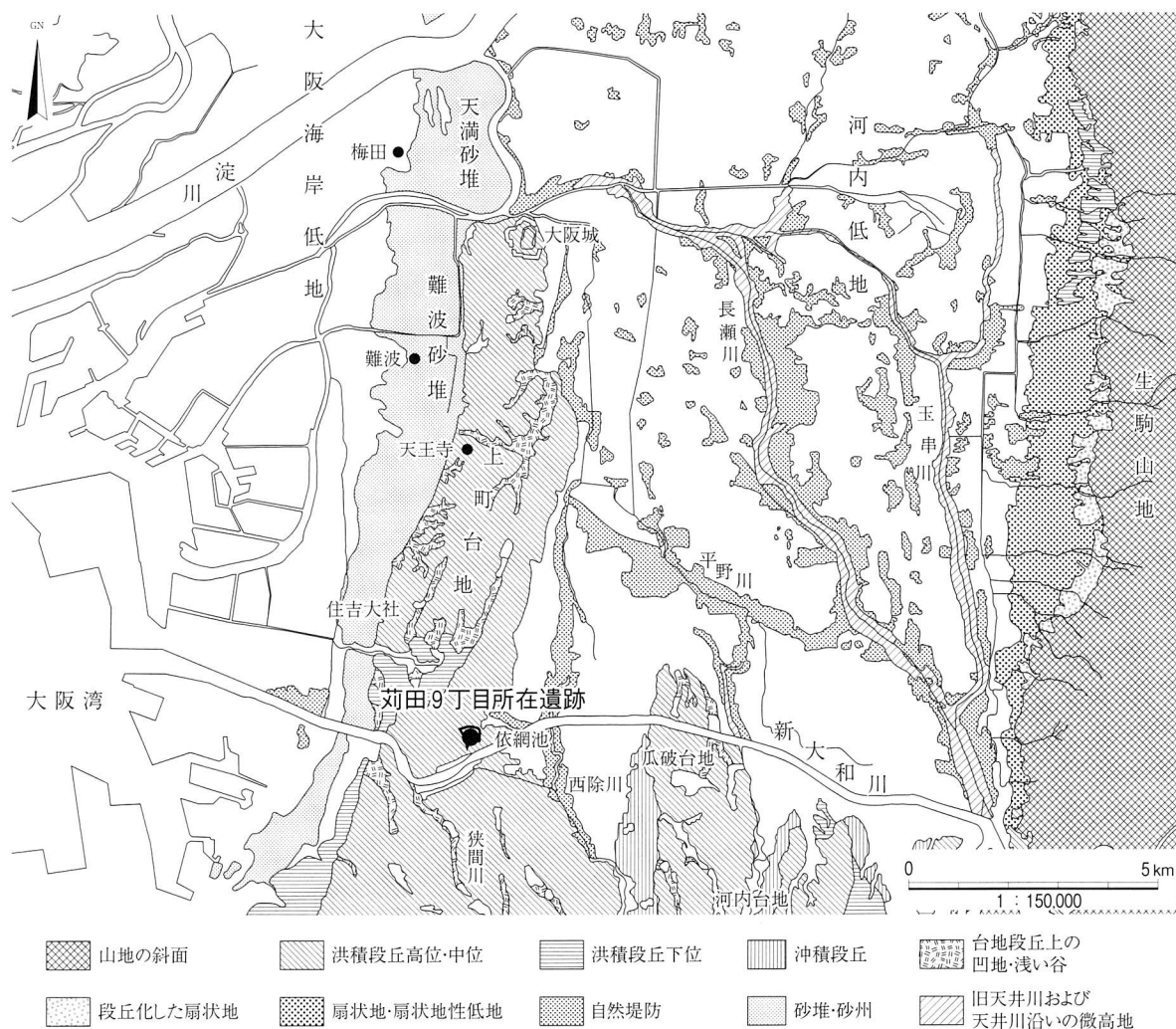


図3 遺跡の立地と周辺の地形分類(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

派生して、荻田の集落が立地する西北から東南方向に延びる自然堤防がある。西除川につながる河川が存在した名残であろう。遺跡の西南には、西北方向に流下する狭間川の旧河道がある。なお、遺跡の南を西流する大和川は1704(宝永元)年に付替えられた人工河川で、本来の地形とは無関係である。ただし、遺跡付近で大和川は大きく南へと迂回している。これは、地盤の固い上町台地の掘削を最小限に留めるために狭間川の川筋を利用したものと理解される。また、東南に位置する依網池は人工の溜池と解されているが、これも旧石器時代以来存続していた古依網沼と呼ばれる沼沢地を利用し、流出した谷を堰き止めたものと考えられる[趙哲済2008]。

これらのことから、荻田9丁目所在遺跡は上町台地の東縁辺に位置するとともに、周囲を川や沼沢地によって囲まれた立地にあるといえよう。

第2節 歴史的環境と周辺の調査

菟田9丁目所在遺跡ではこれまで本格的な発掘調査は行われていない。しかしながら周辺の歴史は古く、付近には多くの遺跡が立地している(図2)。本節では遺跡周辺の歴史的環境とおもな考古学的成果について、時代ごとに記す。

中期旧石器時代では山之内遺跡でナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石が検出されているが、人類の痕跡はまだ発見されていない[大阪市文化財協会1998a]。後期旧石器時代では西北に位置する住吉大社境内遺跡で、サヌカイト製のナイフ形石器の系譜を引く石核が採集されている[石神怡1983]。山之内遺跡ではサヌカイト製剥片が平安神宮火山灰層の下位から発見され、また、後世の遺構からではあるがナイフ形石器が出土している[大阪市文化財協会1998a]。同じく遊離資料ではあるが、ナイフ形石器は西北の南住吉遺跡でも出土しており[大阪市文化財協会2004a]、今後の調査によって石器製作址が発見される可能性はあろう。

縄文時代では、南住吉遺跡で有茎尖頭器が見つかった[大阪市文化財協会2004]。また、山之内遺跡では前期に遡る爪形文を施した土器や、晩期の滋賀里Ⅲa式土器・突帯文土器・石鏃が見つかった[大阪市文化財協会1998a]。

弥生時代には山之内遺跡において前期から遺構・遺物が見られ、中期に入ると南部を中心に建物跡や方形周溝墓が多数検出されるようになる。中期後半に入ると、遺構・遺物ともに減少し、後期には遺構・遺物ともにごく少量となることから、集落は衰退したものと思われる[大阪市文化財協会1998a]。また、南住吉遺跡でも前期の井戸や中期中頃の建物跡が確認されている[大阪市文化財協会1998b]。

古墳時代中期には、大阪湾を望む上町台地上に前方後円墳である帝塚山古墳がつくられる。大阪市内で墳丘が良好に遺存している数少ない古墳の1つである。しかし、円筒埴輪片が各遺跡で出土しているほか、地名・絵図に塚名が残されているものも多く、本来は多数の古墳が築かれていたと推測される。2004年に帝塚山東遺跡で行われた調査では、5世紀末～6世紀前半の帆立貝形前方後円墳が発見され、万代古墳と命名された[松尾信裕2005]。集落としては山之内遺跡では竪穴建物や掘立柱建物・土壇などの遺構が検出され、再び集落が営まれるようになる[大阪市文化財協会1998a・1999]。

古墳時代後期～飛鳥時代にかけては、西の山之内遺跡や遠里小野遺跡で多数の掘立柱建物群からなる大規模な集落が発見されている[大阪市文化財協会1998a]。遠里小野遺跡では鏡状土製品・滑石製品など祭祀に関係する遺物のほか、勾玉・管玉・白玉などの未製品や加工前の石材・剥片・チップなどが大量に出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1994]。また、このころまでには遺跡の東南に『古事記』・『日本書紀』に記述のある依網池が築造されたとみられる。

飛鳥時代には遺跡周辺は重要な歴史的舞台となる。遺跡の東には「難波京朱雀大路」より南へ続く「難波大道」が通っており、北を通る東西方向の長居公園通は住吉津へと続く「磯菰津道」に推定されている。大阪市内では痕跡が見つからないものの、難波大道跡と考えられる道路跡が堺市大和川今池

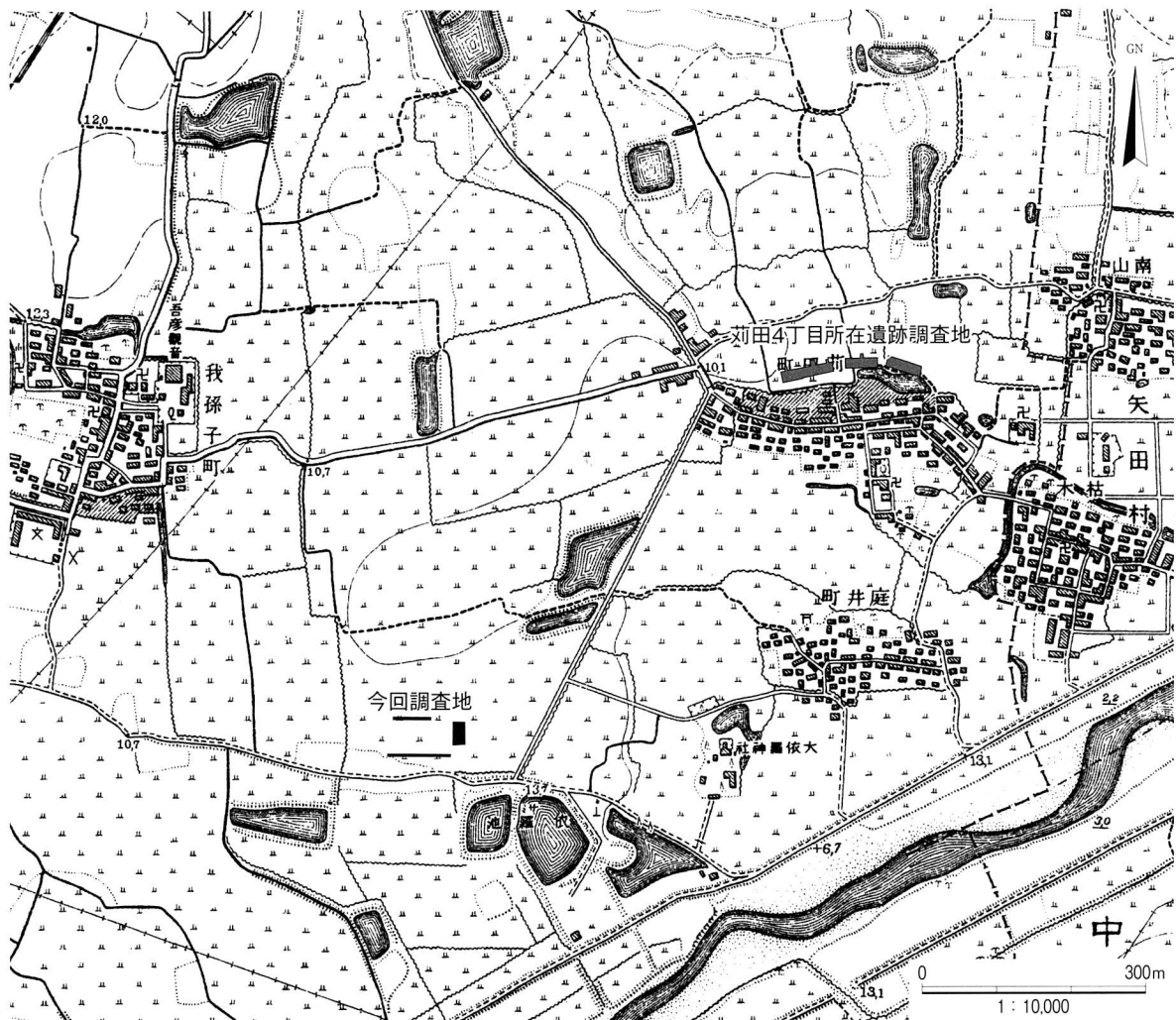


図4 近代の調査地周辺図(国土地理院発行『1万分の1地形図』1927年に一部加筆)

遺跡で検出されている[大和川・今池遺跡調査会1981・大阪府教育委員会1995・大阪府文化財センター2008]。道路幅は東西約17mで、両側に幅2.0～2.9mの側溝を伴っている。飛鳥時代に掘られ、平安時代には廃絶したことが明らかとなっている[大阪府文化財センター2008]。「磯齒津道」沿いとなる南住吉遺跡では6世紀の終わりから8世紀初めと推定される16棟の掘立柱建物群が検出されている。5時期に細分できる建物群が造られており、住吉地域における官人層に連なる有力氏族の居住地と推定されている[大阪市文化財協会1998b]。また、飛鳥時代には遠里小野遺跡で桁行21m以上、梁行7mの巨大な掘立柱建物が検出されている[大阪市文化財協会2009]。さらに、周囲に南北76m、東西94mの範囲に柵を巡らせた桁行15.4m、梁行13.8mの楼阁風の掘立柱建物も検出されており[大阪市文化財協会1999]、文献に見える朴津の港湾施設および儀式などを行う特殊な建物と考えられる。また、同遺跡では白鳳期の多量の瓦を伴う溝が検出され、榎津廃寺の一角と推定されている[田中清美2008]。

飛鳥～奈良時代には、山之内遺跡・住吉大社境内遺跡・南住吉遺跡・荘厳浄土寺境内遺跡など近隣の諸遺跡においても建物跡が見つかったり[大阪市文化財協会2004a・b]。

平安時代では、津守廃寺における発掘調査で9世紀後半～10世紀前半の井戸や、古代と推測される掘立柱建物が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989]。住吉大社境内遺跡でも平

安時代の建物跡や井戸が多数見つっている。また、莊嚴浄土寺境内遺跡では瓦が多数出土している[大阪市文化財協会2004b]。山之内遺跡では掘立柱建物や溝などがみつっているが、遺構・遺物ともに減少している。

鎌倉時代の遺構として、莊嚴浄土寺境内遺跡で13世紀末～14世紀初頭に年代の中心がある建物や井戸、溝を検出し[大阪市文化財協会2004b]、平安末期に創建といわれる莊嚴浄土寺の変遷に関する知見を得ることができた。

室町時代には新堀城跡伝承地・寺岡砦跡・我孫子城跡伝承地など、上町台地南端の要害となる施設が築かれたと伝えられている。また、この時代では注目されるものとして、山之内遺跡と苅田4丁目所在遺跡での鑄造関連の遺構・遺物が注目される。山之内遺跡ではこれらは遺跡北部に集中し、14～17世紀に年代の中心がある。調査面積が狭いものも多く実態は明らかでないが、炉や土塋などとともに鑄型片・炉壁片・鞆羽口などが多量にみつっている[村元健一2004]。後者は14～15世紀が中心となり、区画溝や井戸、粘土採掘塋とともに、鑄型片・炉壁片・鞆羽口などが多量にみつっている(図5)[大阪市文化財協会2004c・2008]。前者は「我孫子鑄物師」、後者は「苅田鑄物師」に関係すると思われる。

中世の苅田を巡る状況については[大阪市文化財協会2004c]に詳しく触れられている。中世の苅田は現在の住吉区南部から堺市の北部に拡がる五箇庄と呼ばれる莊園に属していた。文明3(1471)年の年号をもつ『大徳寺文書』には我孫子屋次郎が土地を大徳寺塔頭の1つである養徳院に寄進してことが記されている。また、その中「金屋」とあるものが認められることから、15世紀後半には苅田を含む五箇庄の地に金属を加工する集団が存在していたことが考えられている。また、『真継家文書』中の「河内鑄物師座法」には「かつた村」「あひこ村」「東堀村」「新在家村」「西堀村」「内かいと村」「にわい村」「大豆塚」の八ヶ村の名が記されている。この文書は、後世に偽造された文書ではあるが、中世末までには成立していたと推定される[名古屋大学文学国史研究室1982]。これらの村はかつては依網池を囲むようにして所在したと思われ、調査地の周辺に古地図などから痕跡をたどることができる。このうち「かつた」は苅田の従来呼び名であったことから、「かつた村」に当たるとして他の村とともに鑄造に関して注目されていた[坪井良平1970]。

先述のように2002・2006年の苅田4丁目所在遺跡の調査によって、室町時代の鑄造に関連する土塋のほか、井戸・区画溝が確認され、苅田に「かつた村」の鑄物師が存在したこと明らかとなった[大阪市文化財協会2004c・2008]。この鑄造関連遺跡は、2002・2006年調査地の南に存在する旧村にかけて拡がるものと推定されている。山之内遺跡の北部で鑄物に関する遺構・遺物が集中して検出され、「あひこ村」の鑄物師に当たると推定されているのとあわせ、五箇庄周辺の鑄物師は室町時代を通じて存続したとみられる。

その後、室町幕府末期の混乱の中で、享禄4(1531)年の「大物崩れ」合戦の際には付近一帯が戦場となり、苅田の地も我孫子・堀とともに三好元長方の陣地の1つに挙げられている[大阪市史編纂委員会1989]。永禄11(1568)年に織田信長が上洛したのち、しばらくは今井宗久が五箇庄の代官とされた。宗久は永禄12(1569)年に苅田を含む五箇庄八ヶ村に禁制を出すなどして金属加工職人の統制を図った

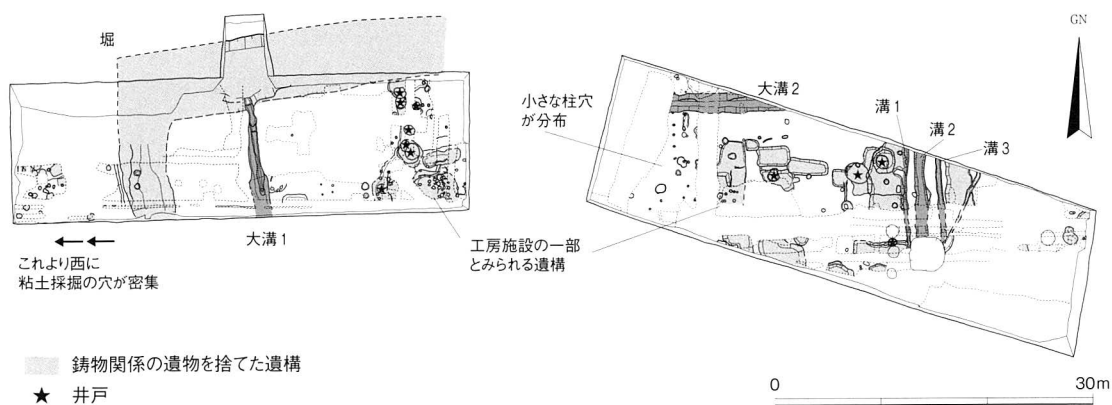


図5 荻田4丁目所在遺跡の遺構〔小田木富慈美2007〕に一部加筆)

ほか、鉄砲の製造にも係わったと考えられている。戦乱の中、付近の村々では周囲に防御のための環濠や土塁が巡らされたといわれる。なお、近世以降の集落もそれ以前の位置を踏襲して存続したとみられ、近代の地図では、荻田をはじめ我孫子や庭井など付近各村の周囲に環濠の名残と推定される池や水路を見ることができる(図4)。

江戸時代以降は、遺跡周辺はおもに耕作地として利用されており、荻田4丁目所在遺跡のほか周辺の諸遺跡で耕作に関連する溝や作土層が確認されている。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

大阪市南端部に位置する住吉区苅田には、各種の集合住宅や民家が建ち並び、ベッドタウンとして多くの人々の居住の場となっている。この中にあって、昭和30年代前半に建築された大阪府営住宅は老朽化による建替の時期を迎え、順次、建替建設事業が計画・施行されてきた。また、これに伴い埋蔵文化財の有無や拡がりを探るための試掘調査も行われ、「苅田4丁目所在遺跡」・「苅田9丁目所在遺跡」の2遺跡が、埋蔵文化財包蔵地として指定された。こうして2002年には、府営苅田北住宅の建替建設に伴い、苅田地域における本格的な発掘調査が苅田4丁目所在遺跡にて初めて行われた[大阪市文化財協会2004b]。同遺跡では引き続いて2006年にも発掘調査が行われている[大阪市文化財協会2008]。

苅田9丁目所在遺跡における今回の発掘調査(図6)も府営住宅建替建設事業の一連の流れにあり、府営苅田住宅建替建設工事に伴うものである。工事に先立ち、大阪府教育委員会による試掘調査が行われたところ、地表下20cm以下に中世以前の遺物包含層が遺存していることが判明した。この結果を受けて、大阪府教育委員会のもと、事業主体である大末建設株式会社と財団法人大阪市文化財協会では、発掘調査および報告書作成の方法等について協議を重ね、これらの作業を平成20年度中に行うことで合意した。

発掘調査の範囲は建物予定地を対象とし、前建物の基礎により攪乱されている部分を除いて3箇所の調査区を設定することとした。ここでは便宜上、1～3区と呼称する(図7)。調査対象となった面積は合計869㎡である。

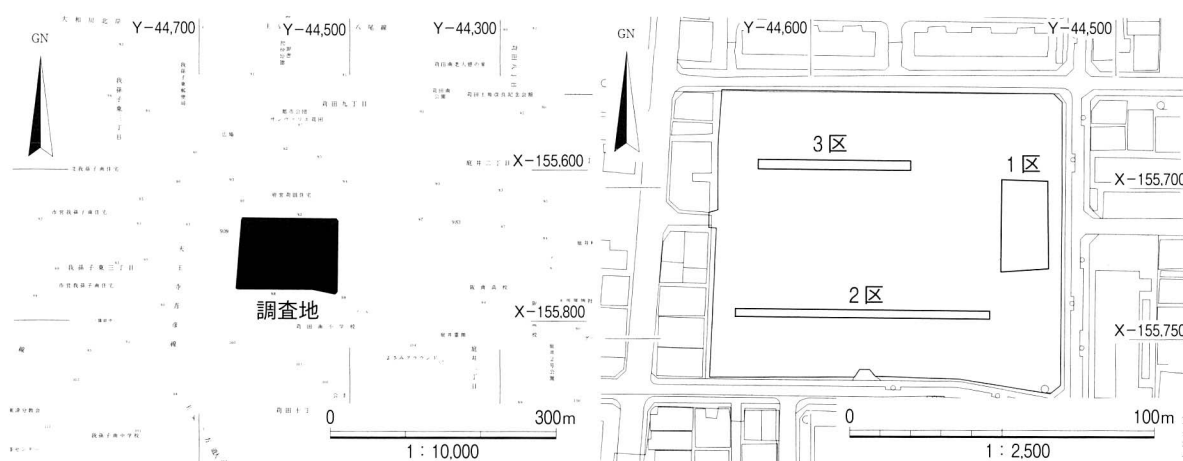


図6 調査地位置図

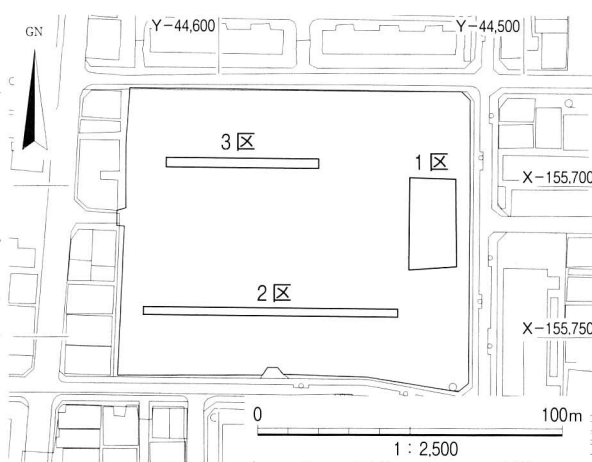


図7 調査区配置図

第2節 調査の経過

現地における調査は2008年5月12日より開始した。調査の着手は、3区より行い、以下2区、1区の順に行った。重機による掘削は現代作土層である後述の第1層までとし、以下は人力による掘削とした。重機掘削を進めたところ、3区については削平によって第1層以下がほとんど遺存していなかったため、結果的に地山層である第5層上面まで重機により掘削することとなった。また、2・3区については、前建物に関する攪乱が広く認められたため、調査地の移動や形状の変更により、調査可能範囲の確保につとめた。

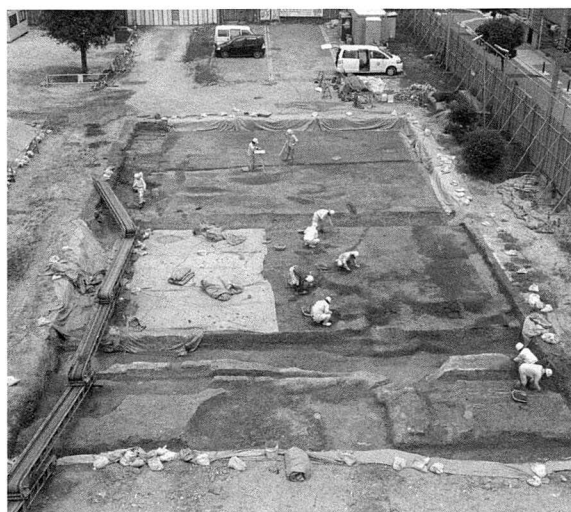


写真1 1区調査風景

人力による掘削開始以後は、各層において遺構検出作業、図面作成、写真撮影などをそれぞれ行った。5月30日には、株式会社かんこうによる基準点測量を行うとともに、7月10日にはクレーンによる空中写真測量を実施した。

また、各調査区ともに地山層の遺存状況が良好な部分では、旧石器遺物を対象とした調査を行うとともに、1区では地層の下位の堆積状況を把握するため、部分的な深掘りを実施した。

7月25日に埋戻し作業、場内整地などの作業をすべて終え、現地における調査を終了した。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

調査地における現在の地形は南側が標高TP+9.9～10.0m、北側が標高TP+9.6～9.8mと南から北へいくぶん下がるもののほぼ平坦である。低位段丘構成層である第5層上面でも南側が標高TP+9.3～9.4m、北側が標高TP+9.1～9.2mと同様で南から北へいくぶん下がるもののほぼ平坦である。ただし、第5層の上面の遺存状況を見ると、1区南側・2区東端・3区東端といずれも後述の第5b層内の礫層が露出しており、第5層は東南部から北側中央部にかけては大きく削平を受けている。本来は東南から西北に向かって延びる高まりがあり、東北および西南方向に下がる地形であったと考えられる。

3区において現代の整地層直下が地山層となるほかは、1・2区で現代作土層以下、古代～近世の遺物包含層が確認された。以下、基本的な層序について記す(図8～11、図版1)。

第0層：府営住宅建設時の盛土層および解体時の整地層で、部分的な掘込みを除いた平均の層厚は1区で10～40cm、2区で20～40cm、3区で20～50cmある。3区では本層直下が地山層であった。

第1層：暗灰黄～オリーブ褐色シルト質粗粒砂層で、1・2区で遺存する。府営住宅建設以前の作土層で、層厚は1区では5～20cm、2区では5～10cmある。本層の下面・第2層の上面から遺構検出作業を行った。1区では断面観察からではあるが、上面で畝の畝と畝間が、1・2区では下面で耕作痕跡が確認された。1区のSD106は本来は本層上面の遺構である。

第2層：褐色シルト質中粒～粗粒砂およびオリーブ褐色中粒～粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚5～15cmで2区のみに遺存する。1区では遺構埋土としてのみ認められる。土師器・須恵器・瓦器細片などが出土し、室町時代に位置づけられる。本層下面で耕作痕跡が確認された。

第3層：オリーブ褐色～黄褐色粗粒砂質シルトからなる作土層で、1・2区で層厚5～10cmで遺存するほか、3区では西端にのみ遺存する。土師器・須恵器・瓦器細片などが出

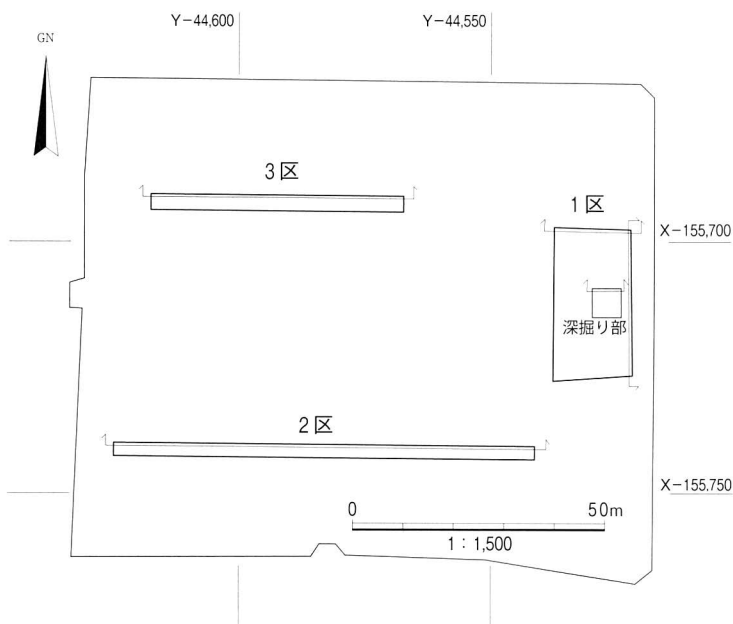


図8 断面図の位置

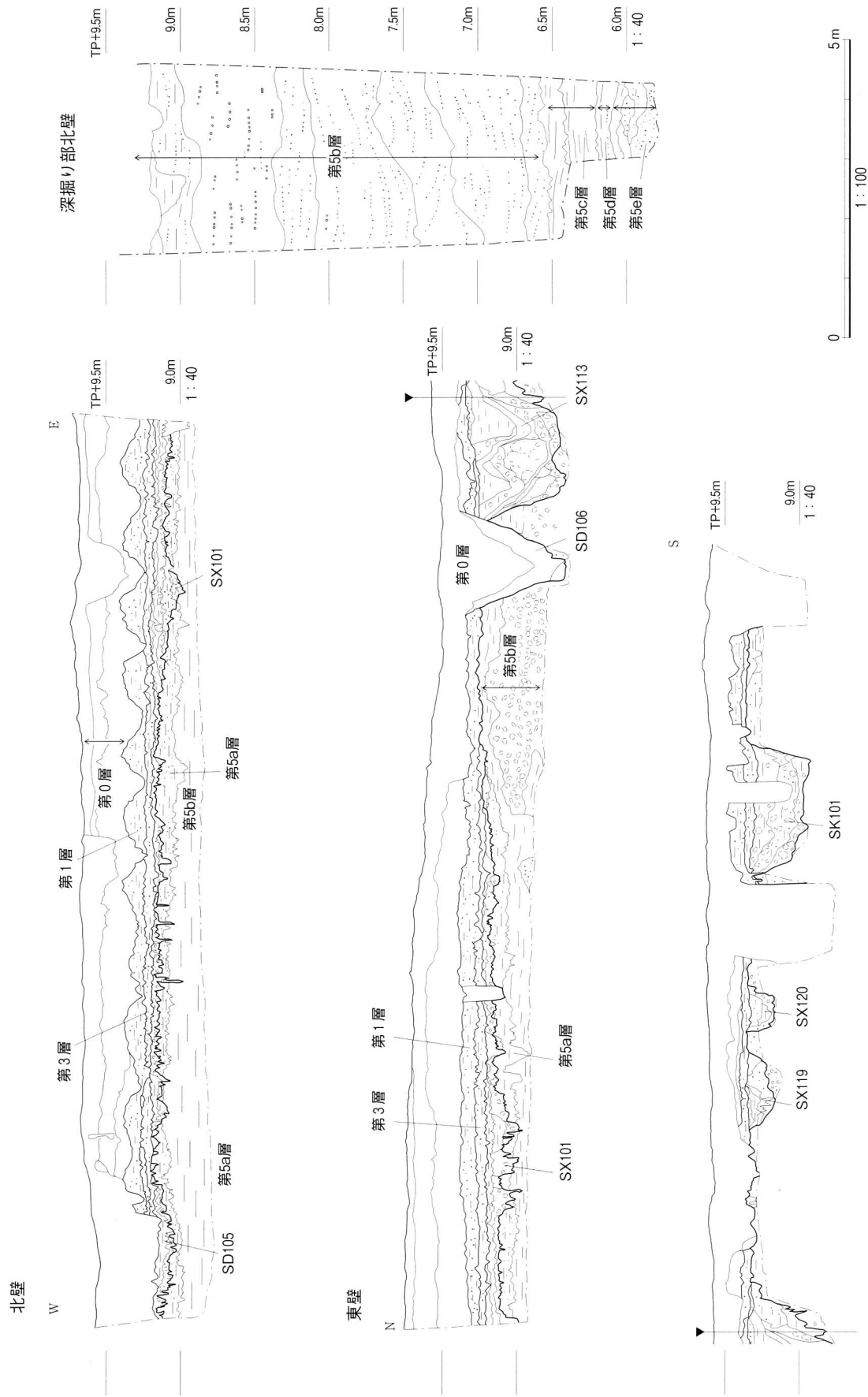


図 9 1 区地層断面図

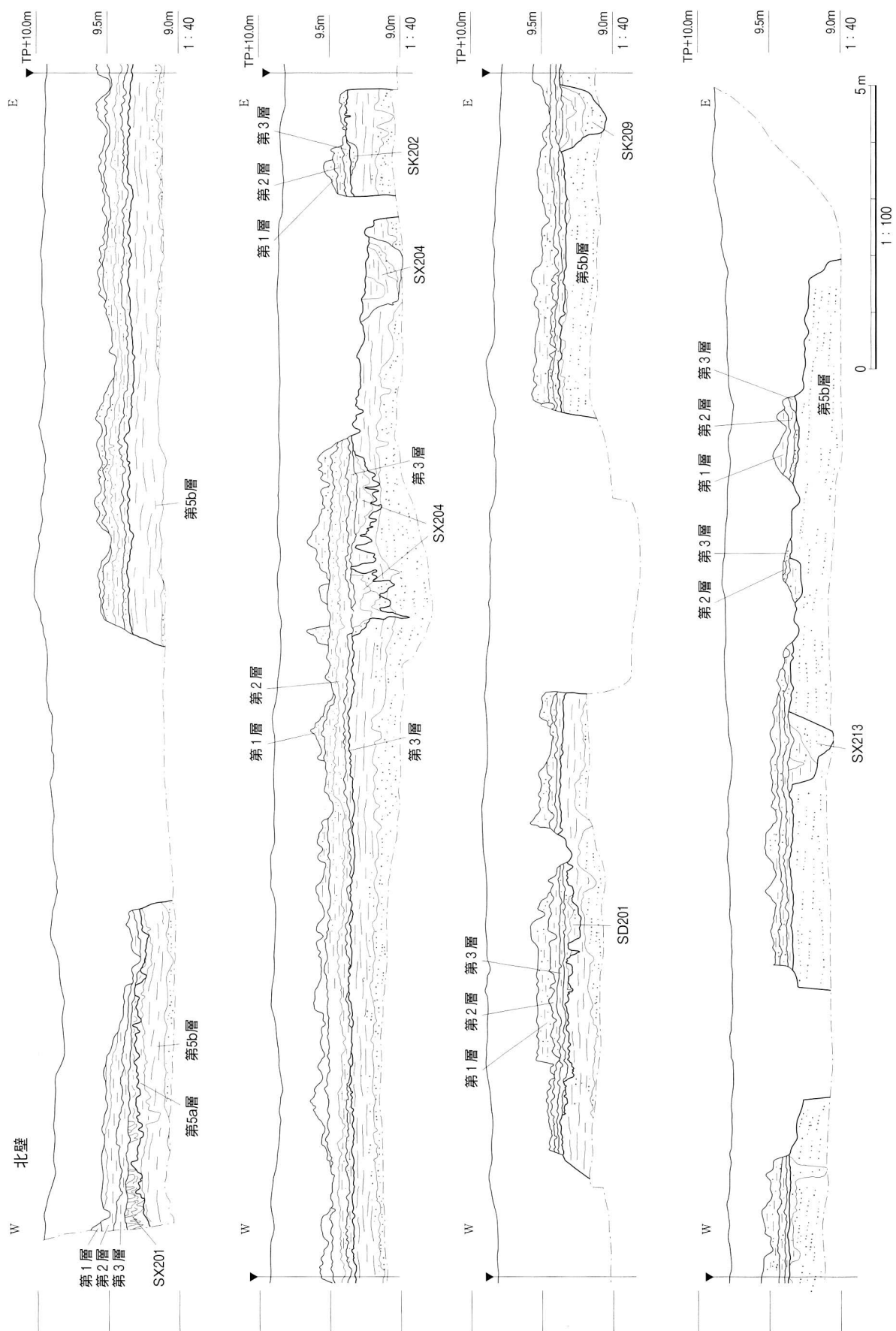


图10 2区地层断面图



图11 3区地层断面图

土し、鎌倉～室町時代に位置づけられる。本層下面で耕作痕跡が確認された。

第4層：灰黄褐色シルト層および地山層である第5層に由来する偽礫を含むにぶい黄褐色シルト層などからなり、1区北東部に層厚20cm未満でSX101の埋土として遺存する。植物の根などにより擾乱を受けているが、自然堆積層である。土師器・須恵器・瓦器細片がわずかに出土したのみであるが、平安時代に位置づけられる。



写真2 1区深掘り部の状況

第5層：低位段丘構成層以下でいわゆる地山層である。第5a～5e層に細分した。第5a層は黄褐色シルト層で、層厚10cm未満で、1区北部・2区西端部・3区西端部にのみ認められる。長原遺跡標準層序[趙哲済2001]のNG13層に対比できよう。本層を対象に旧石器遺物の検出作業を行ったが、遺物は出土しなかった。第5b層以下の層厚は1区における部分的な深掘りにより確認したのみである(写真2)。第5b層は黄褐色細粒砂質シルト～オリーブ灰色砂礫からなり、層厚260cmある。NG15層に対比できよう。第5c層は緑灰色粘土層で層厚は40cmある。NG16A層に対比できよう。山之内遺跡や長原遺跡では、第5b層基底面および第5c層上面にてナウマンゾウなどの足跡化石が確認されているが、本調査地においては第5b層による削剥のためか、検出することができなかった。第5d層は灰～暗緑灰色シルト～粘土層でいくぶん暗色化する。層厚は20cmある。NG16B層に対比できる可能性がある。第5e層は灰～暗オリーブ灰色細粒～中粒砂層で層厚は40cm以上ある。NG17層に対比できる可能性がある。

第2節 平安時代以前の遺構と遺物

各調査区により、層序の遺存状況が異なっていることから、調査時の遺構検出面がそれぞれ異なったものとなっている。1区では第3層基底面および第5層上面の遺構が、2区では第3層基底面および第5層上面の遺構が、3区では第0層基底面の遺構および第5層上面の遺構が相当する。

1) 1区

第3層基底面および第5層上面の遺構が相当する。第4層は東北部にのみSX101の埋土としてのみ遺存しており、この部分以外は検出作業面としては同一である。土壙・溝・落込み・倒木痕・根痕などが検出された(図13、図版2～4)。

i) 落込み

遺構ではないが、地形に関係するものとして最初に報告する。

SX101(図12、図版10) 東北部で認められた落込みである。深さ0.2mで東北に向かって緩やかに落ち込む。埋土は大きく2層に分かれ、上層は暗褐色シルト、下層は地山層に由来する偽礫を含む暗灰黄色～にぶい黄褐色細粒砂質シルトである。両層とも植物の根などによる擾乱を受けてはいるが、平行ラミナが認められる水成層であることから自然の落込みと考えられる。埋土下部では不整形の浅い落込みが、複数確認できた。

遺物は、埋土最上部から土師器・瓦器細片がわずかに出土したのみであった。

1は瓦器碗である。細片で表面の磨滅が著しく、暗文の有無など詳細は不明であるが、12世紀代のものであろう。

他の出土遺物も磨滅したものが多く、埋土上には後述の第3層段階の小溝が多く掘られていたことから、検出作業で見落とした小溝に含まれていた遺物の混入の可能性も否定できない。

SX101は調査区外へ続くことから、落込みの性格や形成年代については現在のところ不明であるが、地山層である第5a層も東北方向に落ち込んでおり、東南から西北に延びる谷の肩部を検出したのかもしれない。谷があるとすれば、調査地東南部に位置する依網池に続く可能性が高く、古代の溜池としての依網池は、谷を堰き止めたものであると理解することができよう。

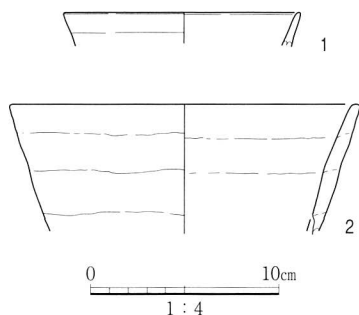


図12 SX101、SX114・115周辺
遺構検出作業中出土遺物
SX101(1)、SX114・115周辺
遺構検出作業中(2)

ii) 溝(図14、図版2・3)

SD101 北でやや東に振る方位の溝である。幅0.4～0.6m、深さ0.2m未満である。断面の形状は皿形でレベルはほぼ平坦である。埋土は2層に分かれ、下層は地山の偽礫を含む加工時形成層、上層は粗粒砂を少量含む灰黄褐色シルトの機能時堆積層である。SX101の埋土上層に先行するが、下層との関係は明らかでない。土師器細片が1点出土したのみであり、時期は不明である。

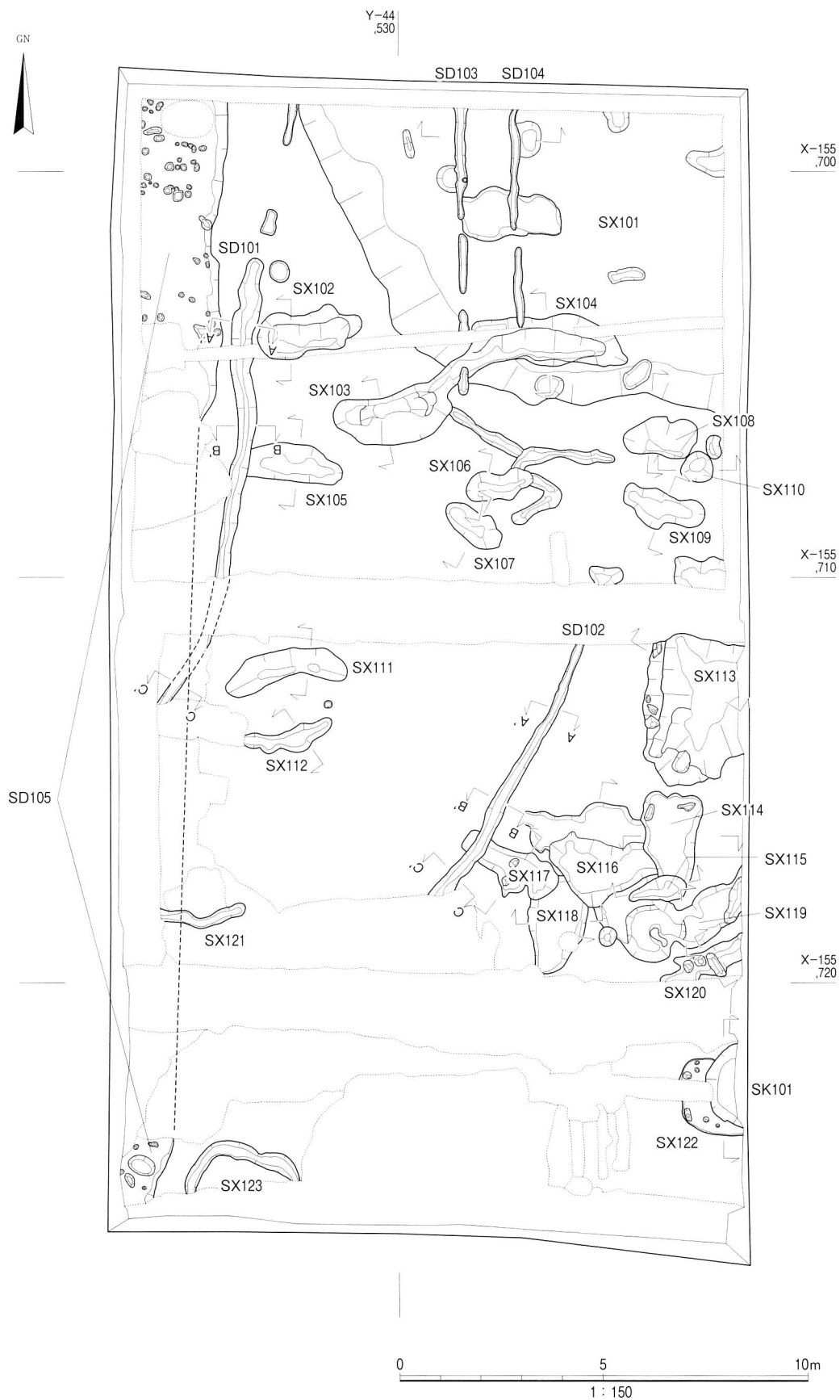


図13 1区第3層基底面・第5層上面の遺構

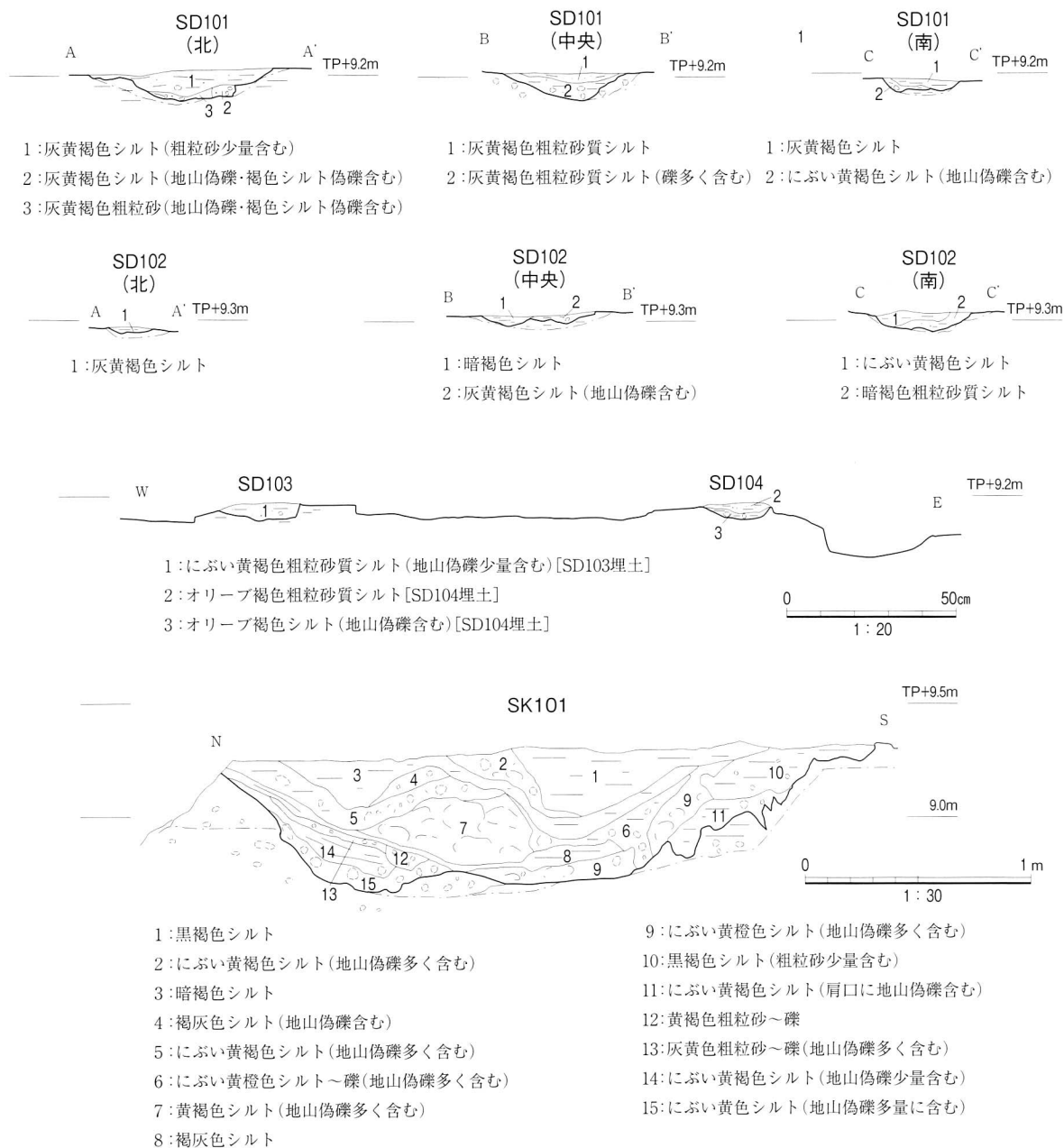


図14 SD101～104・SK101断面図

SD102 南西－北東方向の溝で、幅0.2～0.5m、深さ0.1m 未満である。断面の形状は皿形で、わずかながら北東に向かって下がっている。埋土は2層に分かれ、下層は地山の偽礫を含む加工時形成層、上層はにぶい黄褐色～暗褐色シルトの機能時堆積層である。遺物は出土しなかった。埋土は、SD101と類似し、方向も自然の傾斜に沿っていることから、SD101と同様の時期の溝であろう。

SD103・104 北部で検出した2条の南北方向の溝である。溝の中心間で1.35～1.45mの間隔で平行する。幅0.25m 前後、深さは0.06m 未満で、南部は削平により遺存していない。切合い関係からSX101に後出する。埋土はSD103は地山の偽礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂質シルトの加工時形成層、SD104は下層が地山の偽礫を含むオリーブ褐色シルトの加工時形成層、上層がオリーブ褐色粗粒砂質シルトの機能時堆積層である。水流の痕跡は認められなかったが、上部が削平されているため、本来

の状況は明らかでない。遺物は出土しなかった。

溝の機能は、検出できたのは2条のみのため、耕作痕跡とは考えがたい。平行して存在することから、道路側溝のような何らかの区画を意図したものであった可能性がある。また、自然地形とは異なる南北方向を指向していることから、条里制の制約を受けたものと考えられよう。

SD105 西部北端および南端で検出した南北方向の溝である。攪乱による削平のため、連続して検出できなかったものの、埋土や底の形状が類似すること、検出できなかった箇所においても底の凹凸に由来すると思われる染込みが部分的に認められたことから一連の溝と判断した。

幅は2.2m以上で西肩は調査区外に位置する。深さはもっとも深い部分で0.15mある。埋土は、下部が地山の偽礫を多く含む暗灰黄色シルトの加工時形成層で、上下面ともに凹凸が著しい。上部はオリーブ褐色シルトで機能時堆積層である。遺物は出土しなかった。

溝の機能については、南北方向を示し、何らかの区画であった可能性がある。

SD101～105の溝からは時期を決するだけの遺物は出土していないが、方向からは時期幅があると考えられる。すなわち、方向が自然地形に応じたSD101・102が先行し、方向が南北方向を指向するSD103～105が後出するといえよう。自然地形に応じた方向のSD101・102については、平安時代を遡る可能性も考えられる。

iii) 土壙(図14、図版3)

西南部で1基確認した。

SK101 東が調査区外のため、正確な形状は不明であるが、直径2.8m程度の平面円形を呈すると推定できる。後述のSX102より新しい。深さは0.60mで底は比較的平坦である。埋土は最下部が地山の偽礫が主体であり、それ以上はシルト主体の機能時堆積層および地山の偽礫が主体の埋戻し土が互層となる。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、埋土には第4層が含まれていないことから、第4層よりは古いと推定できる。

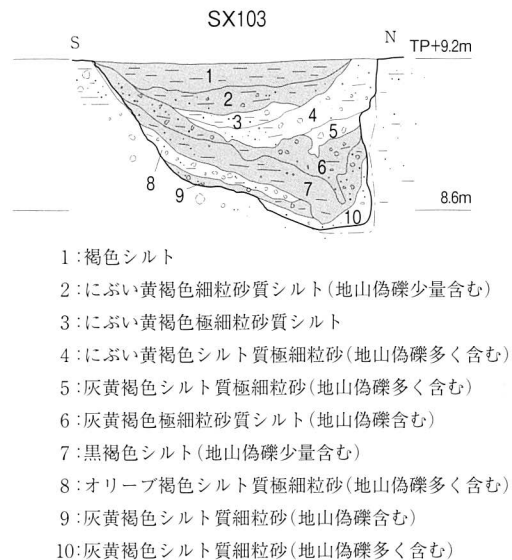
ほかに、全域で土壙状の窪みや小穴が認められたが、これらは遺構ではなく、後述の倒木痕・根跡と考えられる。

iv) 倒木痕・根痕(図15・16、図版3・4・10)

SX102～123が該当する。ほぼ全域で確認された。特徴としては、平面形態が不整形あるいは弧状・溝状を呈すること、肩部の一方が緩やかであるのに対し、もう一方は急あるいはオーバーハングすること、底に凹凸が見られること、埋土に人為とは考えがたい規模の偽礫が含まれること、旧表土とみられる黒色のシルト層が偏って流入するということがあげられ、倒木痕あるいは根痕と判断した。遺構ではないが、環境を示すものとして報告する。

SX102 長さ2.4m、幅0.9mの東西方向に長い平面楕円形を呈し、深さは0.37mある。北側の壁面が緩やかであるのに対し、南側は急で、底部はオーバーハングする。埋土最下部と最上部にシルト～シルト質極細粒砂の流入土が堆積するほかは、地山の偽礫を主体とした埋土である。

SX103 長さ3.2m、幅1.2mの平面形が南に突出する弧形を呈し、深さは0.70mある。SX103と接している。南側の斜面が緩やかであるのに対して、北側は急である。埋土の底付近と最上部に流入土



- 1: にぶい黄褐色シルト(地山偽礫少量含む) 4: にぶい黄色シルト(地山偽礫多量に含む)
 2: 黄褐色シルト(地山偽礫多く含む) 5: 黒褐色シルト
 3: オリーブ褐色シルト(地山偽礫少量含む)

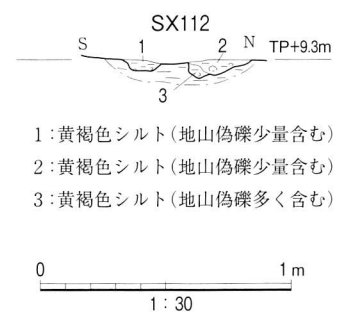
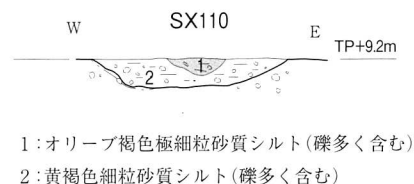
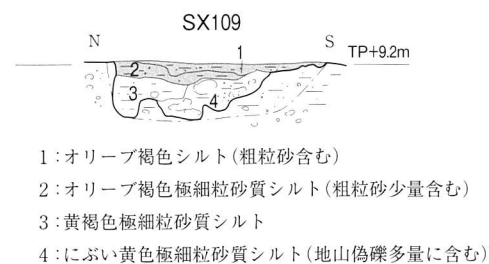
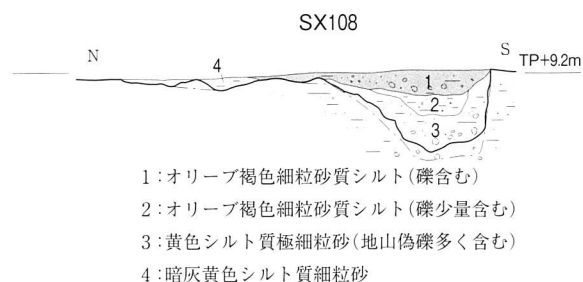
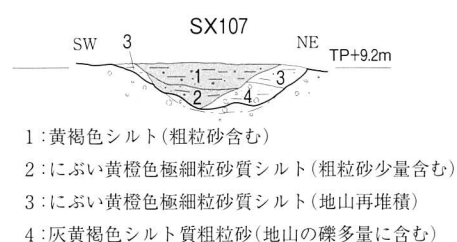
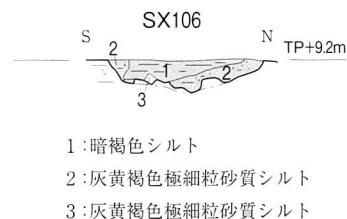
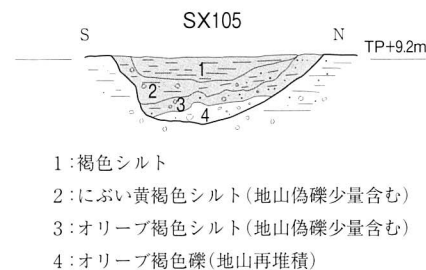


図15 1区倒木痕・根痕断面図(1) [トーンは暗色部を示す]

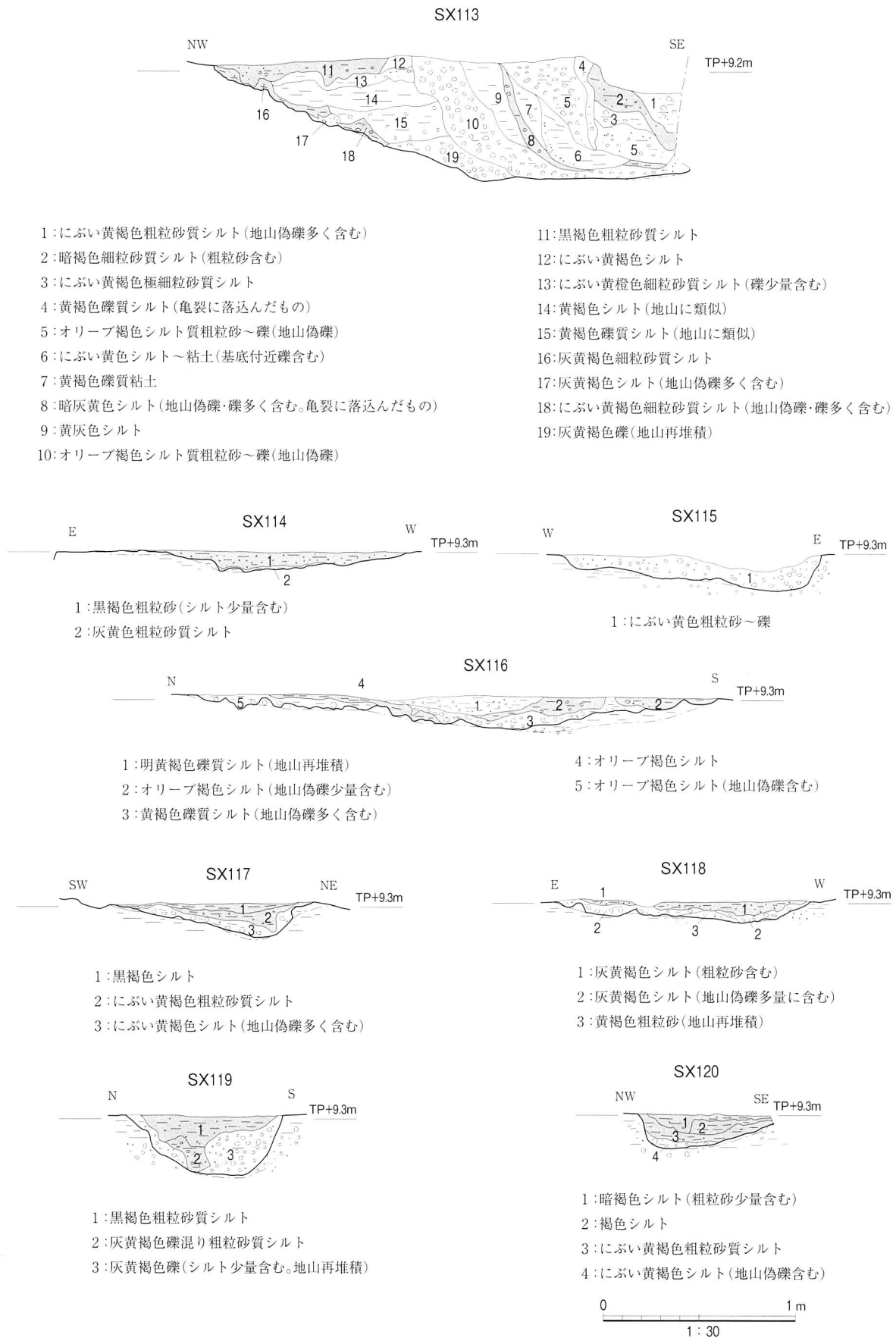


図16 1区倒木痕・根痕断面図(2) [トーンは暗色部を示す]

であるシルトが堆積するほかは、地山の偽礫を主体とした埋土である。

SX104 長さ4.0m、幅1.3mの平面形が北に突出する弧形を呈し、深さは0.65mある。SD101・SX101よりも古い。北側の斜面が緩やかであるのに対し、南側は急である。埋土下部と最上部に流入したシルトが堆積するほかは、地山の偽礫を主体とした埋土である。

SX105 長さ2.5m、幅1.0mの平面形が北に突出する弧形を呈し、深さは0.25mある。北側の斜面が緩やかであるのに対し、南側は急である。埋土は地山の偽礫が主体であり、上部には流入土が堆積する。

SX106 幅0.3～0.6mの不整形な溝状を呈する。深さは0.08～0.15mある。埋土は、地山の偽礫を主体とする部分と、流入土の部分とに分かれる。木根痕と考えられる。

SX107 長さ1.6m、幅1.1mの平面形が楕円形を呈し、深さは0.18mある。埋土は南側にシルトが堆積し、北側は地山の偽礫主体である。

SX108 長さ2.6m、幅1.3mの平面形が北に突出する弧形を呈し、深さは0.30mある。北側の斜面が緩やかであるのに対し、南側は急となる。埋土は最上部に流入土であるシルトが堆積するほかは地山の偽礫が主体である。

SX109 長さ2.6m以上、幅0.9mの平面形が南に突出する弧状を呈し、深さは0.25mある。南側の斜面が緩やかであるのに対し、北側は急となる。埋土は最上部に粗粒砂質シルトが堆積するほかは、地山の偽礫が主体である。

SX110 長さ0.9m、幅0.8mの平面形が楕円形を呈し、深さは0.12mある。埋土は地山の偽礫が主体である。SX108～110で一連の木を構成する可能性がある。

SX111 長さ3.1m、幅0.8mの平面形が北に突出する弧状を呈し、深さは0.50mある。北側の斜面が緩やかであるのに対し、南側は急で、底付近はオーバーハングする。埋土は肩部付近が地山の偽礫が主体で、中央部はシルト～細粒砂質シルトである。

SX112 長さ2.7m、幅0.5mの平面形が南に突出する弧状を呈し、深さは0.07mある。埋土は地山の偽礫が主体である。深さは異なるものの、SX111・112で一連の木を構成する可能性がある。

SX113 長さ4.0m以上、幅2.5m以上の土壇状を呈し、深さは0.65mある。埋土は地山の偽礫が主体であり、部分的に粗粒砂質シルトが堆積する。また、中央部では、地山の偽礫が層準を保ったままで横倒しとなっており、そのクラックに部分的に粗粒砂質シルトが堆積している。

最上部から土師器細片が1点出土したが、時期は不明である。

SX114 長さ2.3m、幅1.3mの平面形が不整形で、深さは0.10mと浅い。埋土は下部が黒褐色粗粒砂質シルト、上部が灰黄褐色シルトを少量含む粗粒砂層である。

遺構検出作業中に、土師器細片と須恵器細片がそれぞれ1片出土した。このうち須恵器片は、甕体部で内部に当て具痕を残す。また、SX114・115の検出作業中に、土師器片2が出土した。2は、形状から鉢と考えられる。粘土接合痕を内外ともに明瞭に残す。口縁端部は平坦な面をもち、口縁部近くには軽いナデ調整が施されている。

SX115 長さ1.4m、幅0.6mの平面形が不整形で、深さは0.20mある。埋土は地山の再堆積土である。

SX116 長さ3.0m、幅2.8mの平面形が不整形で、深さはもっとも深い部分で0.18mである。南側が一段深く落ち込む。埋土は地山の偽礫が主体で、部分的にシルトが堆積する。

SX117 長さ2.7m、幅1.3mの平面形が不整形で、深さは0.18mある。南西側の斜面は緩やかであるのに対し、北西側の斜面は急である。埋土は下部が地山の偽礫が主体で、上部がシルトである。SD102に先行する。

SX118 長さ2.4m、幅1.3mの平面形が楕円形を呈し、深さは0.12mと浅い。埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部は粗粒砂質シルトである。

SX119 長さ3.0m以上、幅1.3mの平面形が不整形で、深さは0.33mある。埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部は粗粒砂質シルトである。

SX120 幅0.7mの溝状を呈し、深さは0.17mある。埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部がシルト～粗粒砂質シルトである。南側に比して、北側の斜面が急である。

SX121 幅0.3～0.4mの溝状を呈し、深さは0.06mと浅い。埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部シルトである。

SX122 東側をSK101によって失われているため正確な形状は不明であるが、直径2.0m程度の平面形が円形を呈し、深さは0.16mある。底は根痕とみられる凹凸が多く認められる。

SX123 幅0.3～0.5mの溝状を呈し、深さは0.05mと浅い。埋土は下部が地山の偽礫が主体で、上部がシルトである。

これらの倒木痕・根痕と考えられるものは、切合い関係や埋土から、検出した遺構群よりも古く位置づけられる。ただし、遺物を含まないものが多く、しかも同一面で検出したため、それぞれの時期やどのくらいの時期幅があるのかについては不明である。

2) 2区

第3層基底面・第5層上面の遺構が該当する。落ち込み・溝・倒木痕・根跡などが検出された(図17～19、図版4～6、10)。

i) 落ち込み

遺構ではないが、自然地形を示すものとして最初に報告する。

SX201(図版5) 西端で検出した不整形な落ち込みである。西に向かって深さ0.03mほど落ち込む。また、幅0.5～0.6m、深さ0.10mの溝状の窪みが取付き、この部分は一段下がっている。ともに人為による加工は認められず、自然の作用により形成されたと考えられる。埋土は黒褐色シルトで、下部を中心に踏込みが多く認められ、底面は凹凸が激しい。シカと推定される偶蹄類のものがある。踏込みは、SX201の輪郭を越えて東に広がっており、削平を受けて遺存していないが、本来はもう少し東から斜面が始まっていたのであろう。西への広がりも不明であるが、ベースとなる第5a層も西へ行くほど落ち込んでいることから、さらに西側に下がっていく可能性が高い。

磨滅した土師器細片が少量出土したのみであり、形成時期は不明であるが、埋土は1区のSX101よりは古い印象を受け、全域で検出された倒木痕の黒色シルトに類似することから、平安時代を遡るも

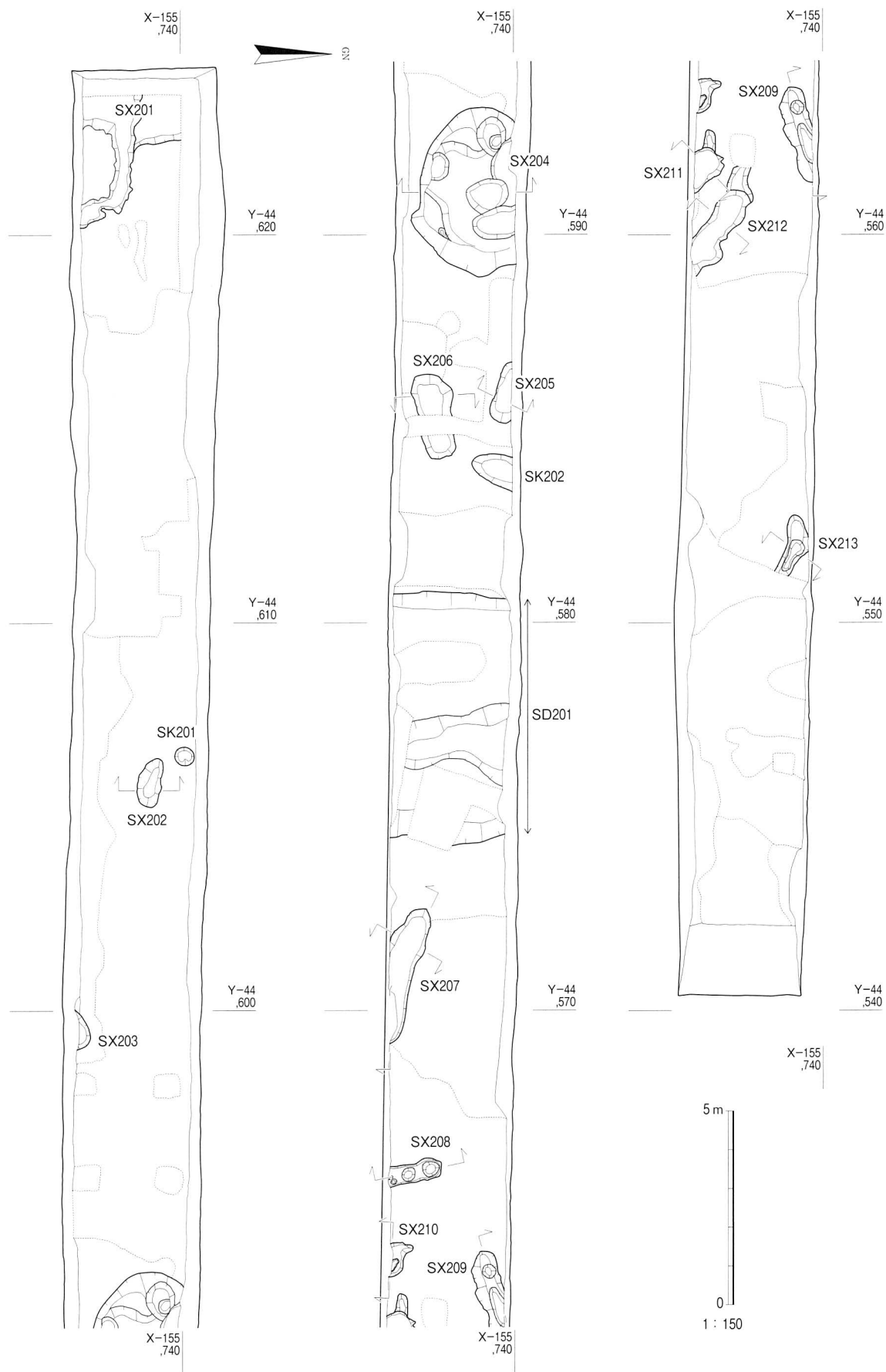


図17 2区第3層基底面・第5層上面の遺構

のであろう。

ii) 溝

中央部で1条確認した。

SD201(図18・図版5) 途中を攪乱により失われているが、幅6.0～6.1m、深さはもっとも深い部分で0.12mある。底面には掘削時の凹凸のほか、踏込みが多く認められた。埋土は下部が地山の偽礫を含む加工時形成層で、上部がシルトからなる機能時堆積層である。流水の痕跡は確認できなかった。

埋土からは、土師器・須恵器・黒色土器片が少量出土した。いずれも細片であるが、4点を図化しえた。

3～5は土師器である。3は小皿で、器壁は厚手である。4は碗で、高台の付くタイプのものであろう。体部にはユビオサエの痕跡が認められる。5は甕で、口縁部は短く屈曲し、端部には水平な面をもつ。6は内黒の黒色土器碗である。

これらの出土遺物は少量ではあるが、長原遺跡の土器編年[佐藤隆1992]の平安時代Ⅲ期古段階頃の特徴を示すことから、溝の年代は10世紀末～11世紀初頭を中心とするものであろう。

iii) 土壇(図19)

2基を確認した。

SK201 西部で検出した直径0.4m、深さ0.15mの平面形が円形の小土壇である。埋土は下部が地山の偽礫を多く含むシルトで加工時形成層、上部が褐色シルトで機能時堆積層である。遺物は出土しなかった。

SK202 中央部で検出した。北部が調査区外へ続くため正確な形状は不明であるが、長さ1.1m以上、幅0.7mの平面形が楕円形の土壇である。断面は浅い皿状で、深さは0.08mある。埋土は粗粒砂を少量含むシルトで、機能時の堆積層である。須恵器甕体部片が1点出土した。

iv) 倒木痕・根痕(図19、図版5・6)

全域で確認した。特徴は1区のものと同様である。西から順に記述する。

SX202 長さ1.3m、幅0.4mの平面形が楕円形で、深さは0.15mである。埋土は、北側が地山の偽礫、南側が細粒砂質シルトである。

SX203 一部を検出したのみであり、形状や規模は不明である。深さは0.20mある。埋土は東側が地山の偽礫が主体、西側がシルトである。

SX204 北部が調査区外に続くが、東西4.3m、南北約3mの平面形が楕円形とみられる。深さはもっとも深い部分で0.35mある。中央部が浅く、周囲が深い。埋土は中央部が地山の偽礫が主体で、周囲がシルトである。

SX205 一部が調査区外であるが、長さ1.6m、幅0.6mの平面形が楕円形で、深さは0.10mである。底には根痕とみられる凹凸がある。埋土は黄褐色シルトである。

SX206 長さ2.2m、幅1.0mの平面形が楕円形で、深さは0.27mである。北側の斜面が緩やかであるのに対し、南側は急である。埋土は下部および南側が地山の偽礫が主体で、ほかは流入土であるシルトである。

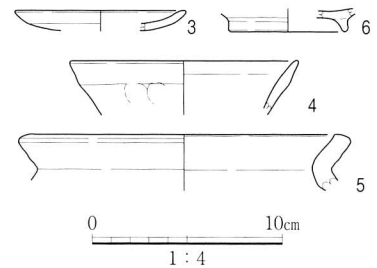


図18 SD201出土遺物

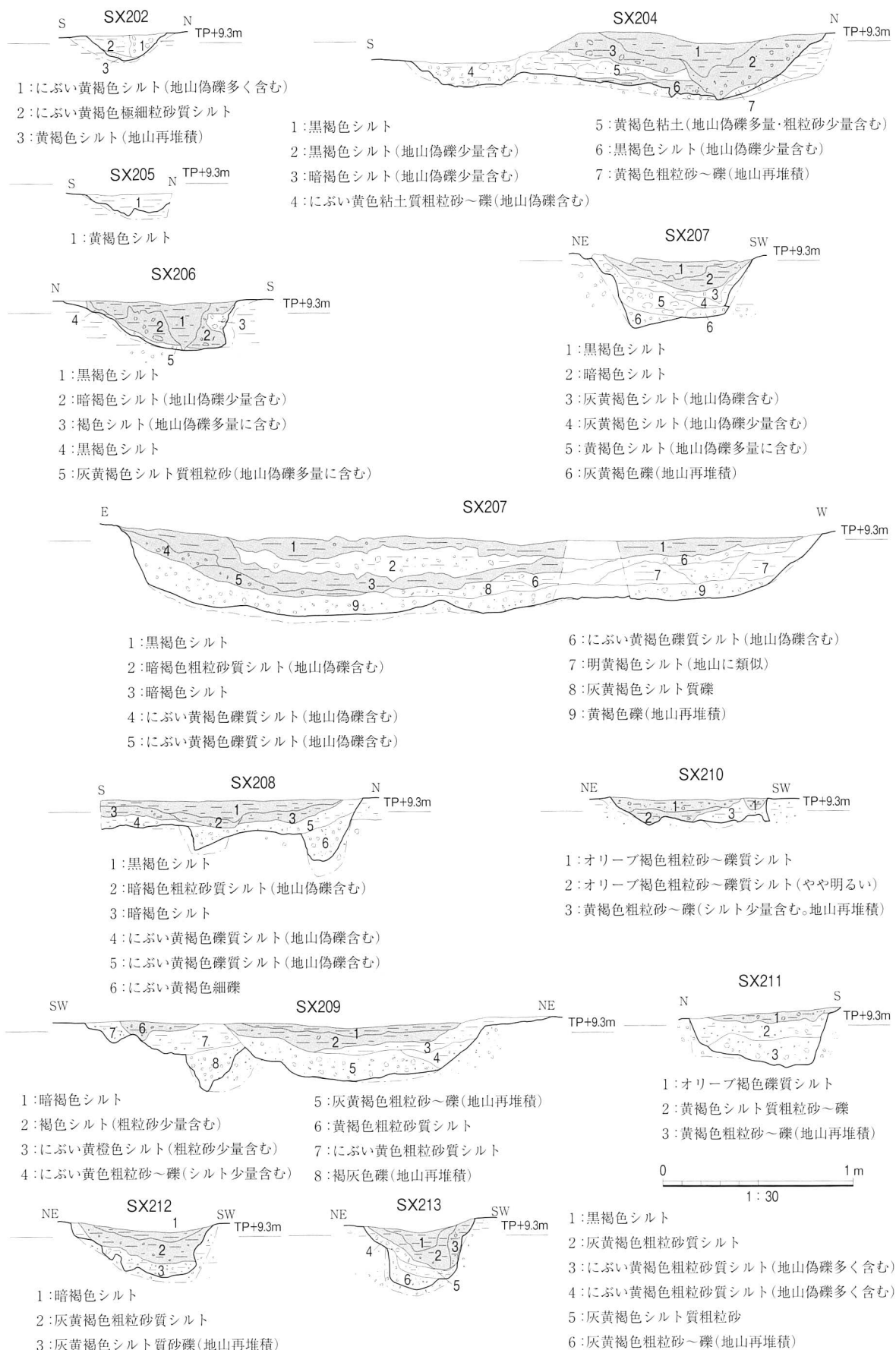


図19 2区倒木痕・根痕断面図[トーンは暗色部を示す]

SX207 調査区外へと続くため、正確な形状は不明であるが、長さ3.5m以上、幅1.0mの平面形が楕円形と考えられる。深さはもっとも深い部分で0.47mである。埋土は下部が地山偽礫主体で、上部はシルトである。

SX208 南部が調査区外へ続くが、長さ1.4m以上、幅0.5mの平面形が楕円形で、深さは北端でもっとも深く、0.43mである。埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部がシルトである。

SX209 一部が調査区外であるが、長さ2.5m前後、幅0.7mの平面形が楕円形である。底の形状や、埋土のようすから東西に2基重なっている可能性がある。西側は深さ0.36m、東側は深さ0.35mある。埋土はともに、下部が地山の偽礫が主体で、上部がシルトである。

SX210 南部が調査区外のため形状は不明である。深さは0.15mである。東側の斜面が緩やかであるのに対して、西側の傾斜は急である。底は凹凸があり、根痕とみられる窪みも認められた。埋土は西側が地山の偽礫が主体、東側が流入土である。

SX211 南部が調査区外であるが、長さ1.1m、幅0.9mの平面形が隅丸方形で、溝状の部分が取付く。深さは0.30mである。埋土の多くは地山の偽礫が主体で、最上部が流入土である。

SX212 長さ2.5m以上、幅0.7～0.9mの平面形が楕円形で、深さは0.25mである。西側に浅い落ちが取り付く。底は凹凸があり、埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部が流入土である。

SX213 長さ1.5m以上、幅0.6mの平面形が北に突出する弧状を呈し、深さは0.36mある。埋土は下部が地山の偽礫が主体、上部が流入土である。

これらの倒木痕・根痕は、1区同様出土遺物に恵まれず、時期を決定することはできない。

3) 3区

第0層基底面・第5層上面の遺構が相当する。3区では、ほとんどの箇所第0層直下が地山層である第5層であった。府営住宅建設もしくは解体時に大きく削平を受けており、遺構の多くは失われた可能性がある。とくに東半は礫層の地山が露出しており、削平の程度は大きいと考えられる。不整形な落込みのほか倒木痕を確認した(図20・21、図版6)。

i) 落込み(図21、図版6)

西部で検出した。

SX301 溝状を呈する浅い落込みで、深さは0.10mある。埋土は下部が地山の細礫サイズの偽礫を含むシルト、上部がオリーブ褐色シルトである。SX302と埋土が類似し、本来一連のものであった可能性がある。一連であったとすると、SX301の方が底の標高が高く、肩部に近いと考えられる。遺物は出土しなかった。

SX302 SX302の東に位置する最大幅3.4mの不整形の落込みである。深さは0.12mと浅い。底には凹凸が認められる。埋土は下部が地山の細礫サイズの偽礫を含むシルト、上部がオリーブ褐色シルトとSX301と共通する。遺物は出土しなかった。

SX303 周囲をすべて攪乱により失われているため、形状・広がり是不明である。深さは0.08mと浅く、底には細かい凹凸が認められる。埋土は下部は地山の細礫サイズの偽礫を含む細粒砂質シルト、

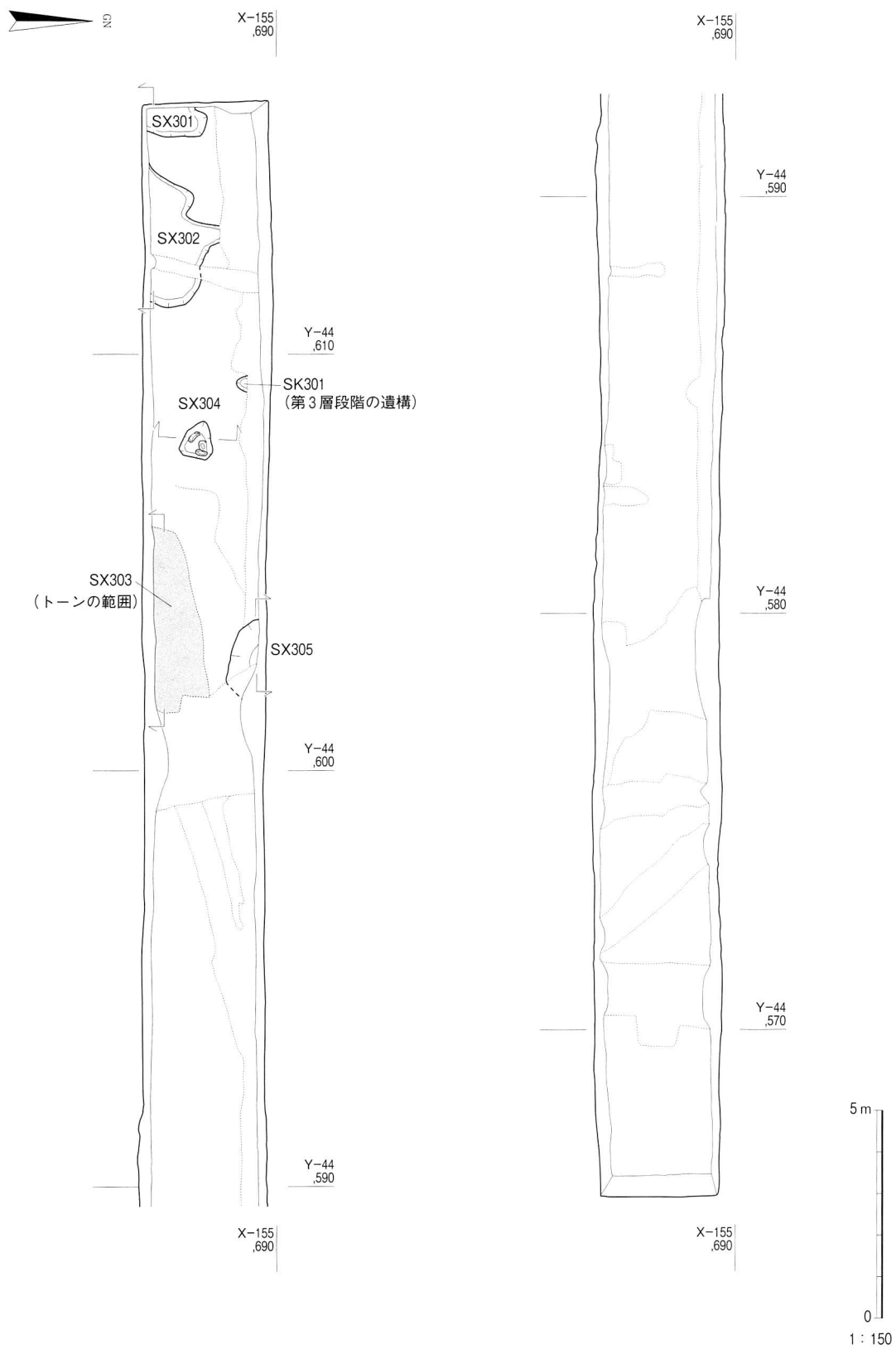


図20 3区第0層基底面・第5層上面の遺構

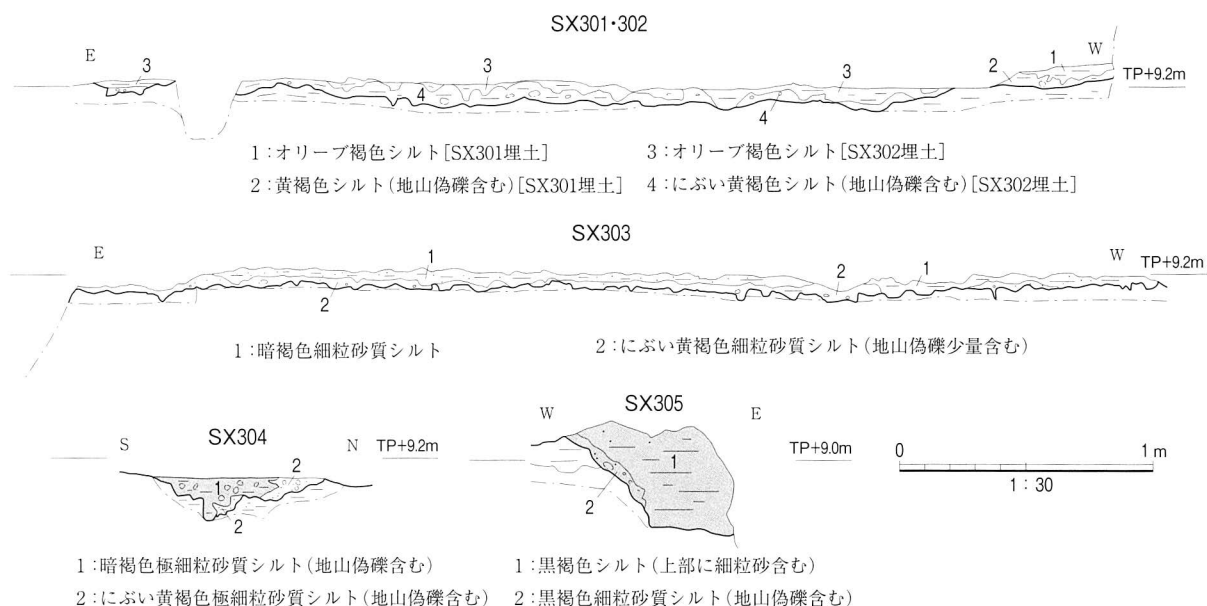


図21 3区第0層基底面・第5層上面の遺構断面図[トーンは暗色部を示す]

上部が暗褐色の細粒砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

ii) 倒木痕・根痕(図21、図版6)

西半で2基を検出した。

SX304 最大長0.9mの平面形が不整円形で、深さは0.17mである。底部は根による凹凸が顕著に認められる。埋土は北側が地山の偽礫が主体で、南側は流入土である。遺物は出土しなかった。

SX305 多くが調査区外のため本来の形状・規模は不明である。深さは0.46m以上である。埋土は黒褐色シルトである。磨滅した土師器片が出土したが、詳細は不明である。

4) 平安時代以前の土地利用について

平安時代以前の遺構と考えられる遺構として、数条の溝および土壇が検出された。また、自然と関係が深いものとして落込み、倒木痕・根痕などを確認した。総じて遺物が少なく詳細な時期は不明であるが、これらの遺構などには時期幅があるとみられる。

まず、地山層の傾斜やSX101のようすから調査地の東には東南から西北方向の谷筋があったと推定される。これは、調査地の土地利用を考えるうえで重要な要素を占めている。依網池へと続く可能性がある。依網池は、古墳時代に築かれた溜池とされるが、その際、この谷筋を堰き止めて築いたものであるかもしれない。

同じく地山層の傾斜やSX201のようすからは、調査地の西側にも谷状の地形が広がっていた可能性がある。そうすると、今回の調査地は東西を谷に挟まれた尾根に立地し、広い平坦地ではなかったと推定できる。倒木痕は、多数の木が生えていたことを意味する。後世の削平を考慮する必要があるが、居住に関係する遺構が認められなかったのはこうした理由によるのかもしれない。

今回検出した遺構から判断する限り、時期は不明であるが、自然地形に沿う方向の溝SD101・102の掘削が当地における開発の最初であろう。その後、南北方向の溝SD103～105・201が掘削される。

地形を克服した方位であり、周囲を含めた開発が行われたのであろう。溝の中で時期が判明したものはSD201の10世紀末～11世紀初頭頃であるが、遅くとも平安時代には、南北方向を指向した大規模な開発が行われたといえ、その機会は条里制の施行であった可能性が高い。集落に関する遺構は検出されず、総じて遺物が少ないことから、調査地は耕作地として利用されていたのであろう。

第3節 鎌倉～室町時代の遺構と遺物

第2・3層段階の遺構が相当する。ここでは、第3層段階と第2層段階と分けて記述することとする。

1) 第3層段階の遺構と遺物

遺構としては、第3層下面の遺構が相当する。多くの小溝のほか土壌などを検出した。

i) 1区

調査地全域で多数の小溝や土壌を検出した(図22・23、図版7・10)。

a. 小溝群

小溝群(図23) 幅0.1～0.3m、深さ0.05m前後の小溝群である。幅がそれ以上のものもあるが、これは小溝が重複した結果による。また、SX201の上部に当る東北部では小溝が疎であるが、これは調査中の降雨により、柔らかいSX201の埋土上部が失われたことによるもので、本来の有無とは無関係である。小溝の方位は南北方向も少数あるが、ほとんどが東西方向である。埋土は第3層であるオリブ褐色～黄褐色粗粒砂質シルトで、SX201の上部ではSX201の埋土に由来する偽礫を含むものもある。これらの小溝群は、第3層の耕起に関係する小溝であり、滞水の痕跡が認められないことから、鋤溝であるといえよう。

出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器があるが、いずれも細片であり、図化できるものは少ない。

7は瓦器碗である。磨滅が著しく表面が剥落して調整は不明であるが、13世紀代のものであろう。

b. 土壌

東南部で1基検出した。

SK303(図23) 東西1.8m、南北0.7～0.8mの平面形が方形に近い土壌である。深さは0.03mと浅い。埋土は第3層に同じである。

土師器・瓦器細片が少量出土した。瓦器には碗の高台片があり、高台は退化したものである。

c. 第3層出土遺物(図22、図版10)

第3層からは、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦片などが出土した。いずれも細片である。

8は土師器小皿である。13世紀後葉～14世紀前葉に位置づけられる。9・10は

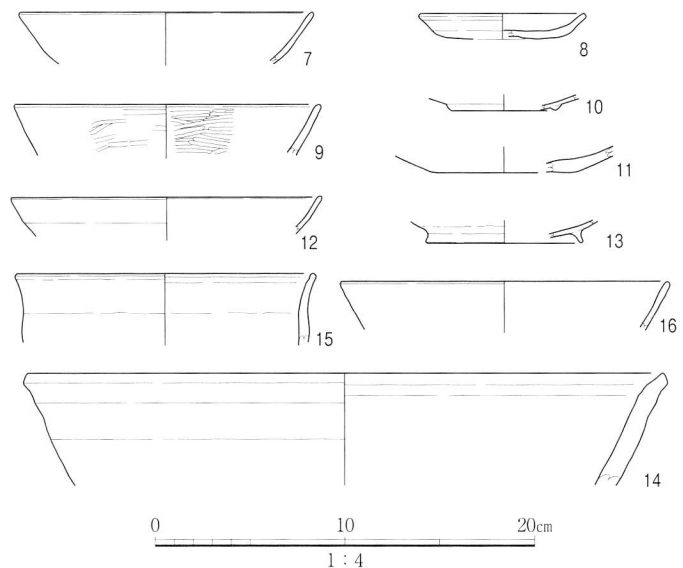


図22 1・2区出土遺物

1区第3層小溝群(7)、1区第3層(8～10)、
2区第3層小溝群(11～14)、2区第3層(15・16)

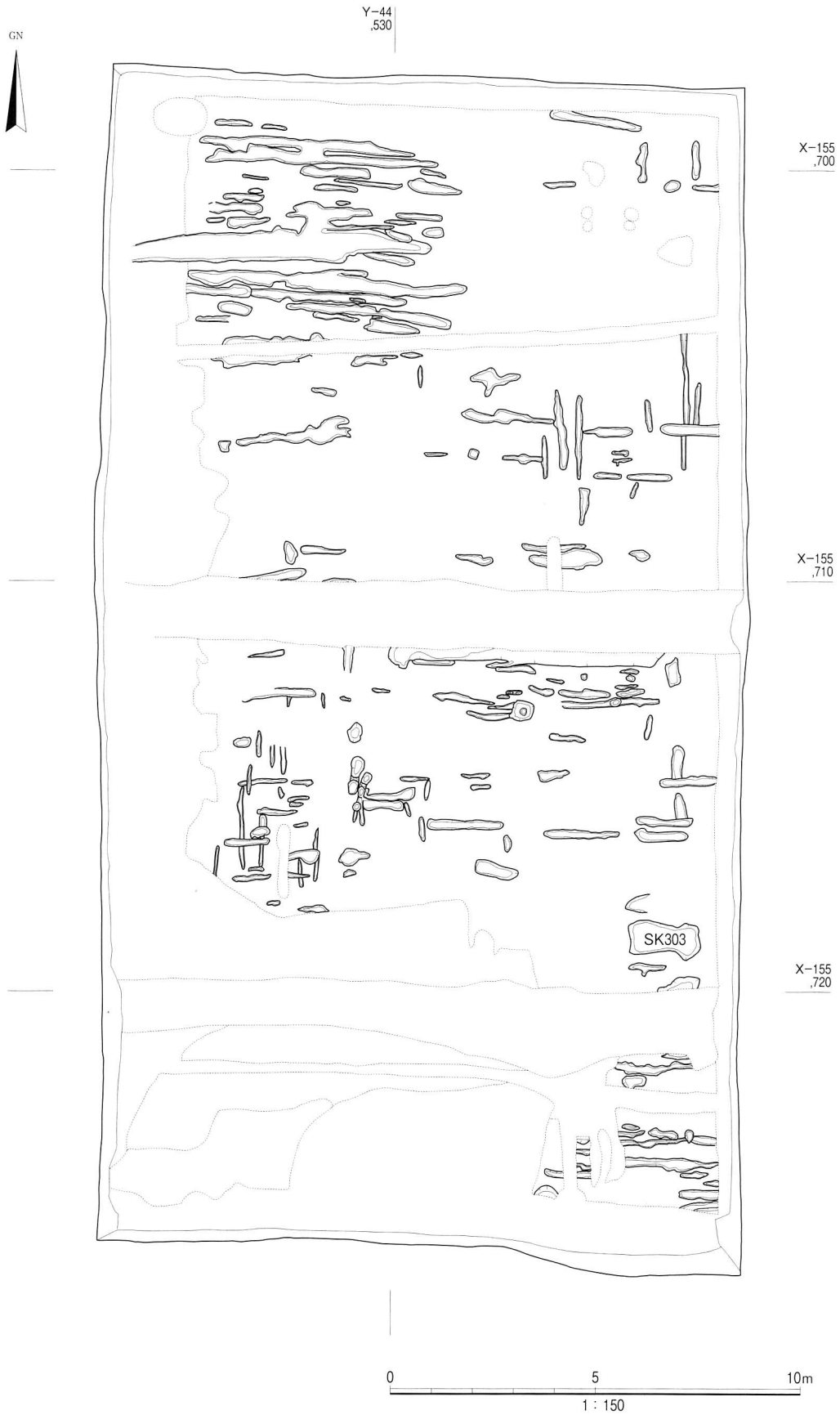


図23 1区第3層下面の遺構

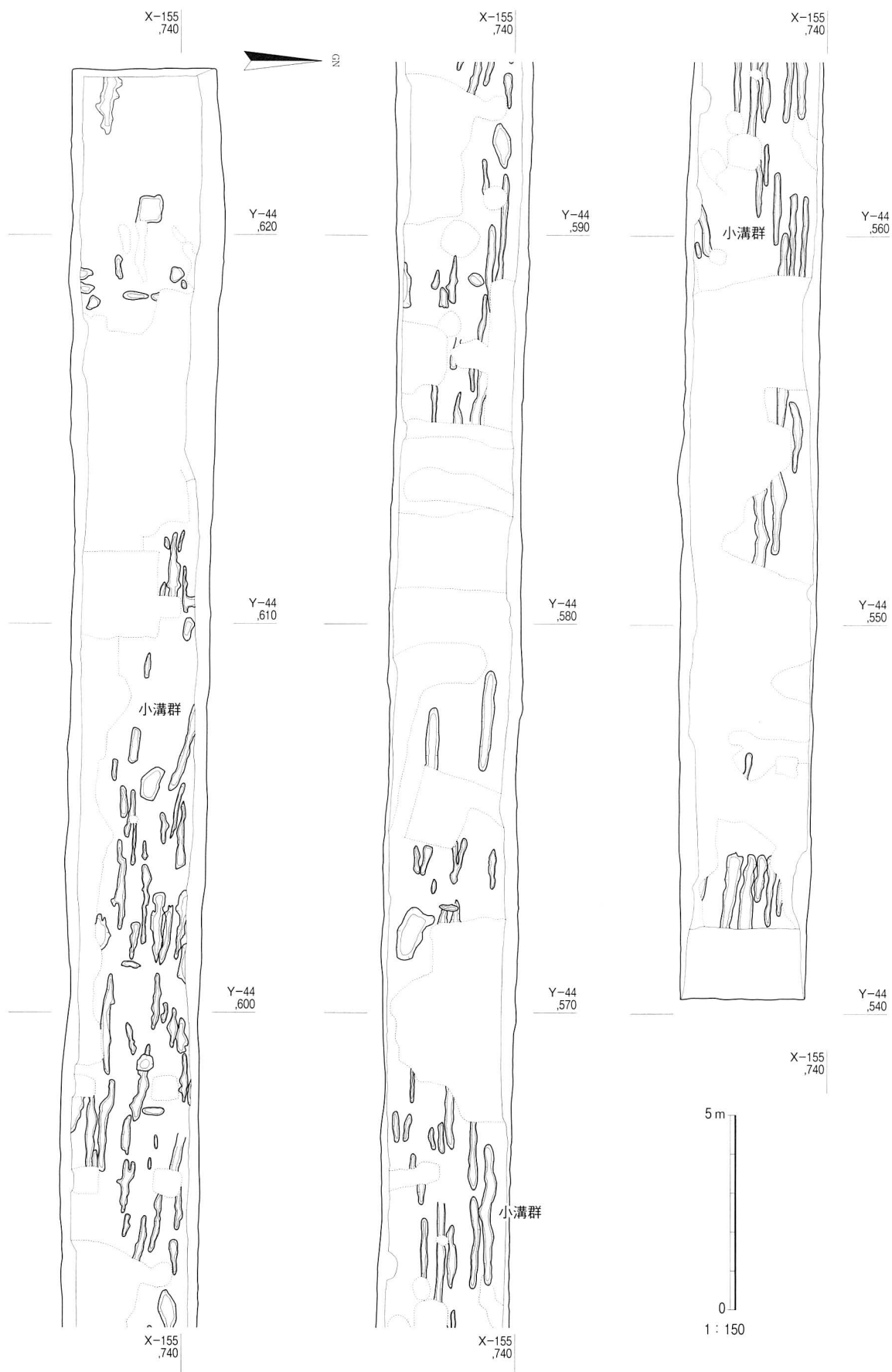


図24 2区第3層下面の遺構

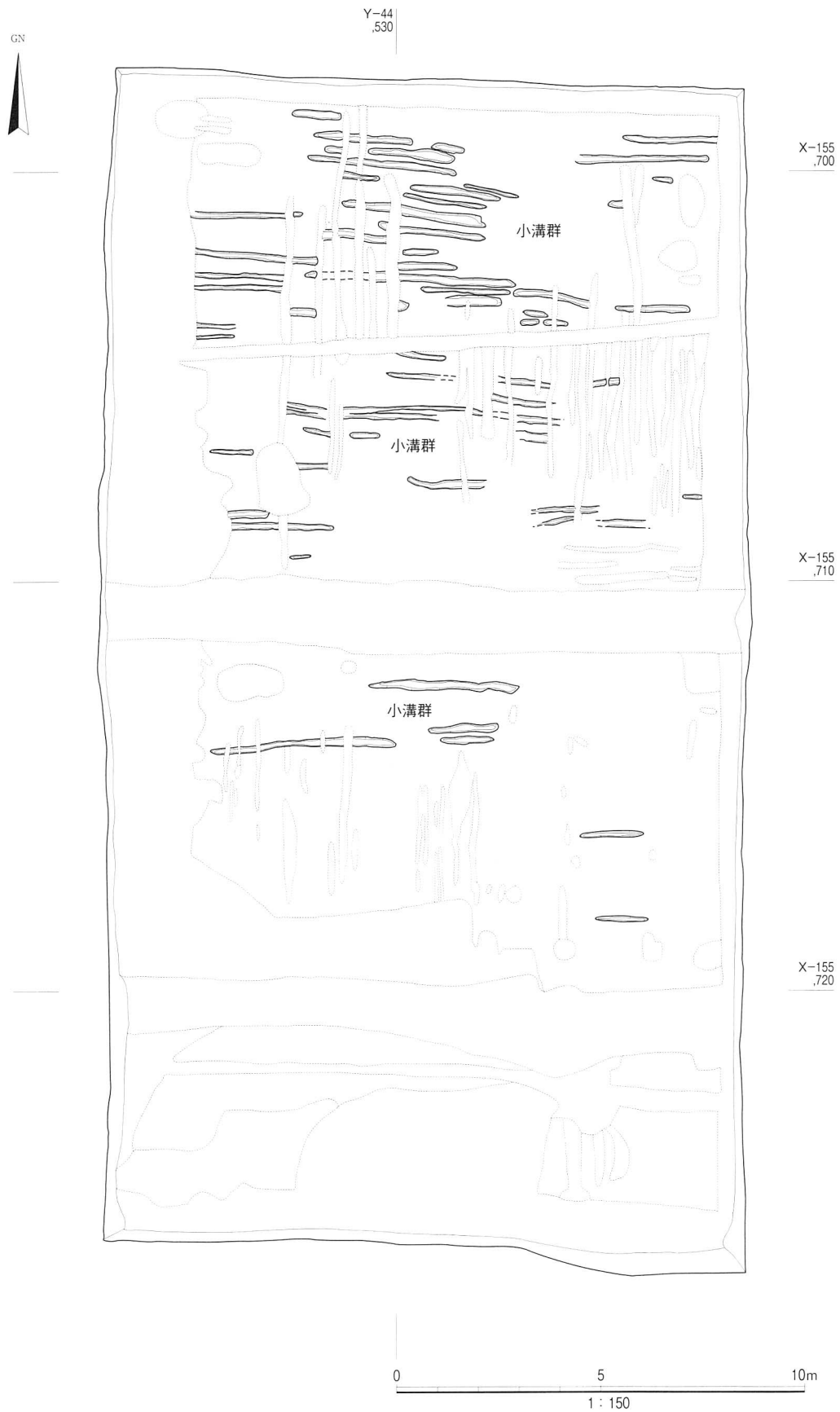


図25 1区第1層基底面の遺構



図26 2区第2層下面の遺構

瓦器碗である。9は内外面ともに暗文が認められ、12世紀中葉～後葉のものであろう。10は高台片で、断面三角形の退化した高台が付く。13世紀後葉～14世紀前葉に位置づけられる。

ii) 2区

調査地全域で多数の小溝を検出した(図22・24、図版7・10)。

a. 小溝群

小溝群(図22・24) 幅0.1～0.3m、深さ0.05m前後の小溝群である。方位はほとんどが東西方向であり、1区の状況と同じである。埋土は第3層であり、滞水の痕跡は認められないことから、第3層段階の耕作に関係する鋤溝である。

出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器があるが、いずれも細片である。

11・14は土師器である。11は平底の鉢と考えられる。14は鉢で、やや丸みをもつ体部から、口縁部は緩く外反する。口縁端部は平坦な面をもつ。12・13は瓦器である。いずれも磨滅している。13は、高台部で12世紀後葉を中心とする時期のものであろう。

ほかに図化できなかった遺物には高台の退化した瓦器碗も含まれる。

c. 第3層出土遺物(図22・図版10)

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦が出土した。いずれも細片である。

15は土師器甕である。口縁部から体部にかけての屈曲は弱い。16は瓦器碗である。暗文は認められない。14世紀代のものであろう。

iii) 3区(図20)

3区では第1～3層が遺存しておらず、第0層基底面のSK301が埋土から当該層の遺構に該当する。小溝群は検出されなかったが、これは府営住宅建設もしくは解体時の削平によるものであろう。

SK301 北半が調査区外であるが、直径0.3m前後の平面形が円形の土壇である。深さは0.07mと浅い。埋土は第3層と同様のオリーブ褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

2) 第2層段階の遺構と遺物

遺構としては第2層下面の遺構が相当する。3区を除く全域で小溝群が確認された。

i) 1区

1区では、第2層が遺存していないことから、第2層を埋土とする第1層基底面の遺構が該当する(図25、図版7・8)。検出作業面としては、第1層下面の遺構と同一であることから、埋土によって両者を区分した。

小溝群(図25、図版8) 全域で多くの小溝を確認した。幅0.1～0.3m、深さ0.05m前後の小溝群である。第3層段階と同様、東西方向の小溝がほとんどである。埋土は第2層と同じで、滞水の痕跡は確認できなかった。第2層段階の耕作に伴う鋤溝である。

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器があるが、細片で図化できるものはなかった。

ii) 2区

2区では、第2層下面の遺構が該当する。全域で多数の小溝が確認された(図26、図版8)。

a. 小溝群

小溝群(図26・図版8) 全域で多くの小溝を確認した。幅0.1～0.3m、深さは0.05m 前後である。検出したすべての小溝が東西方向であり、方向としては第3層段階を踏襲している。埋土は第2層と同じで、滞水の痕跡が認められないことから、第2層の耕起に伴う鋤溝である。

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片で、図化できるものはない。

b. 第2層出土遺物

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片で、図化しうるものはない。概ね第3層出土の遺物と変わらない。確実に15世紀代に降る遺物は確認できなかった。

iii) 3区

3区では、遺構は検出できなかった。府営住宅建設もしくは解体時の削平により失われたといえる。

3) 鎌倉～室町時代の土地利用について

鎌倉～室町時代の遺構として、第3層段階と第2層段階の2時期の耕作に関係する小溝群が確認された。3区では検出されなかったが、これは削平によると判断できることから、いずれの時期も調査地は耕作地として利用されていたのであろう。

第3層の段階は東西方向の小溝群が主体である。出土遺物が少なく、詳細な検討は困難であるが、第3層の段階は出土遺物から鎌倉時代を中心とし、一部が室町時代に降ると推定できる。ただし、平安時代に属する遺物も一定量認められることから、前段階の溝とあわせ考慮すると、耕作地としての利用は平安時代に遡る蓋然性が高いであろう。

第2層の段階も東西方向の小溝群が主体であり、引き続き耕作地として利用されていたことがわかる。出土遺物および第3層の年代観からみると第2層の段階は室町時代前葉、14世紀代を中心とするものであろう。確実に15世紀に降る遺物は確認できなかった。

また、両段階ともに耕作地でありながら、遺物が含まれることから、近隣に集落が存在していた可能性は高いであろう。

第4節 江戸時代以降の遺構と遺物

現地における調査は、第0層および第1層を除去した時点から開始した。そのため、第2層よりも新しい時期の遺構については、同一作業面での検出となっている。

1) 1区

先述のように1区では、第2層が遺存していないため、第3層上面での遺構検出作業となった。第2層段階の遺構とそれ以上の段階の遺構が混在して検出されている。ここでは、埋土のようすから第2層段階の遺構を除いた遺構を報告する。第1層を埋土とする第1層下面の遺構のほか、第1層よりも古く、第2層よりも後出する埋土の遺構がある。多くの小溝のほか溝・土塹などを検出した(図27・29・30、図版7～10)。

i) 土塹(図27・29・30、図版9・10)

北半において2基を確認した。埋土は、いずれも第1層よりも古く、第2層よりも新しい。

SK104 調査地西北端で検出した。長さ1.3m、幅0.9mの東西方向に長い平面形が楕円形で、深さは0.40mである。上部には深さ0.15mの攪乱が存在することから、本来の深さは0.55mはあったといえる。埋土は地山や第2・3層、SD105に由来する偽礫を多く含む埋戻し土である。土塹の機能は不明である。

土師器・瓦質土器細片が各1点のほか肥前磁器が1点出土した。

17は肥前磁器染付碗である。高台脇に1条の圈線と体部に花文が描かれている。内底面の釉は掻き取られている。18世紀代のものであろう。

SK105 調査地東北部で検出した。長さ1.2m、幅0.7mの東西方向に長い平面形が不整形の土塹である。深さは0.17mである。埋土は大きく2層に分かれ、下部は第2層以下の偽礫を多く含む加工時形成層、上部は暗灰黄色粗粒砂シルトからなる機能時堆積層である。土塹の機能については不明である。遺物は出土しなかったが、埋土のようすから江戸時代の遺構と考えられる。

ii) 小溝群・溝

小溝群は全域で、溝は中央部で確認した。

小溝群(図27、図版7・8) 埋土が第1層に同じであるものがほとんどであるが、第1層に類似し、やや淡い色調のものもある。両者は厳密には区分できなかったが、第2層段階の埋土とは大きく異なっている。小溝群の方位は南北方向を示すものが多く、第2層段階の小溝群が東西方向であることとは様相を異にしている。ただし、後述のSD106付近では東西方向となっており、SD106が区画となっていたと推定できる。溝の機能としては、第1層あるいはそれ以前の耕作に伴う鋤溝であろう。

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器などがあるが、時期を示すものはない。層序の項で記したように第1層が府営住宅建設直前まで機能していた作土層であることから、小溝群の年代は、昭和30年代以前と推測できる。また、層相からではあるが、やや淡い色調を埋土とするものは、周辺の遺跡で



図27 1区第1層下面の遺構

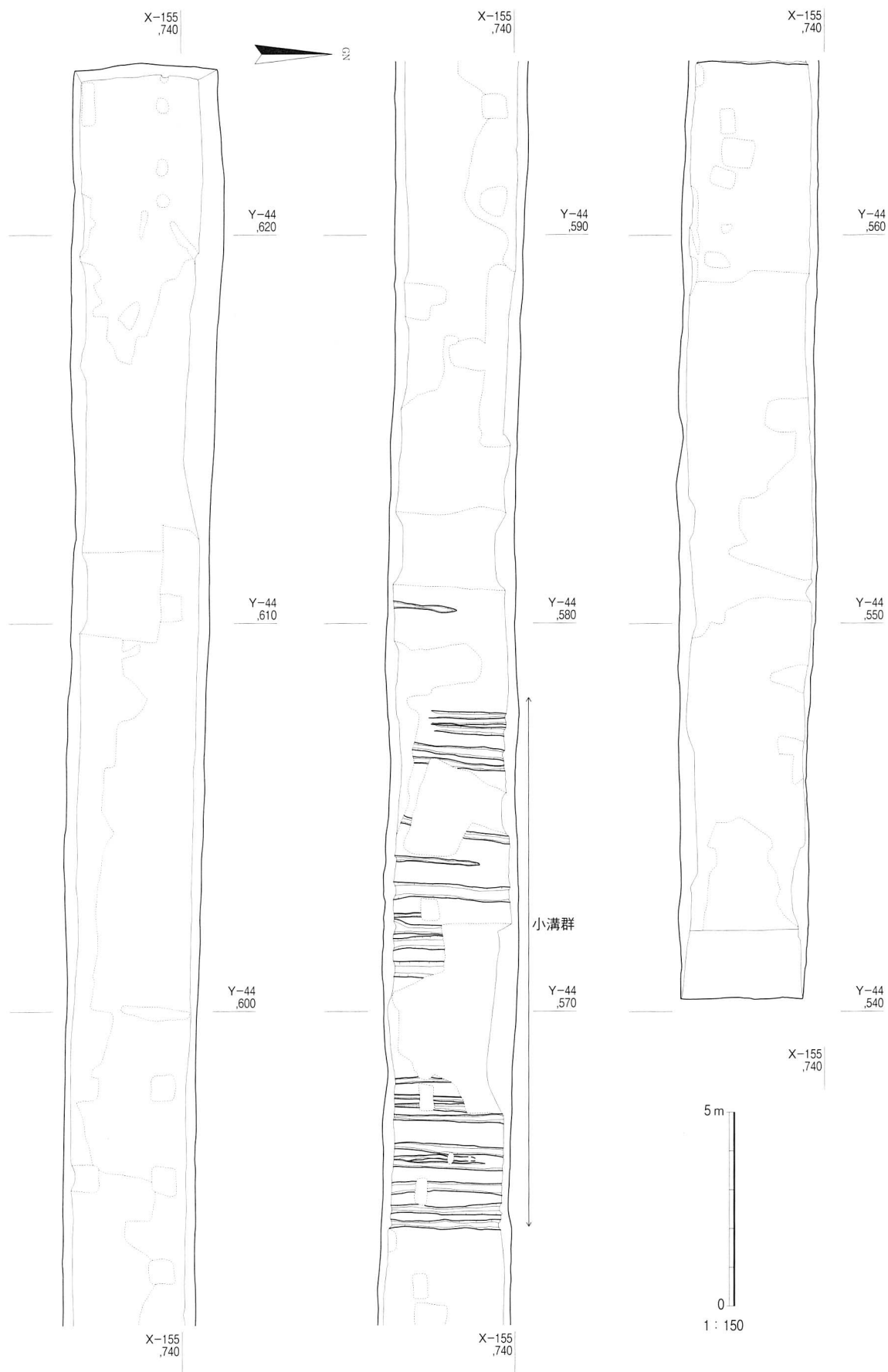


図28 2区第1層下面の遺構

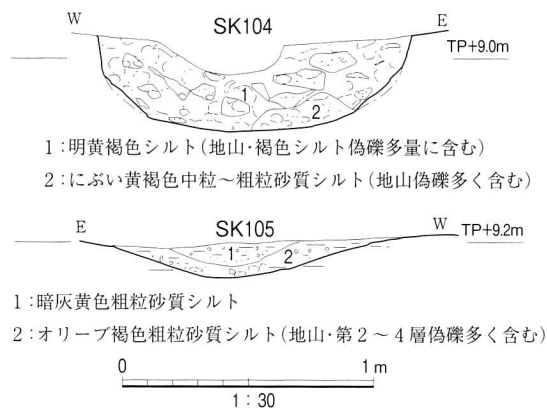


図29 SK104・105断面図

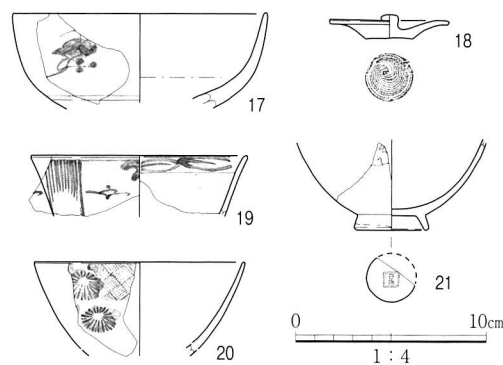


図30 SK104・SD106出土遺物
SK104(17)、SD106(18～21)

確認されている江戸時代の作土層に類似しており、小溝群の中には江戸時代に遡るものもあると考えられる。

SD106(図27・29、図版7・8、10) 幅1.5～1.7m、深さ0.75m 前後の東西方向の溝である。埋土は3層に大きく区分できる。下部が地山の偽礫を主体とする加工時形成層、中部が粗粒砂質シルトからなる機能時形成層、上部が府営住宅建設時の埋戻し土である。中部は水つきの堆積状態を示す。断面による観察では第1層上面から掘込まれているが、埋土に第1層の流入も認められたことから、少なくとも第1層の段階には機能していたといえる。

埋土中部からの出土遺物には、国産陶磁器類のほか、ガラス瓶、釘などの金属製品がある。

18は陶器の蓋である。底面は糸切りで、外面にはオリーブ褐色の釉が施されている。19～21は磁器の碗である。19にはプリント、20には手描きによる絵付けが施されている。19は反端りの口縁部をもつ。21は体部は一部しか残存していないが、その上半部に金彩による上絵付けが施されている。高台内には、裏印として、二重四角内に縦位の「日陶」がある。

これらの遺物や埋土の状況から、府営住宅建設時である昭和30年代前半までSD106は使用されていたといえる。機能としては、区画を兼ねた耕作地の導排水にあったと推定できる。掘削された年代であるが、出土遺物から江戸時代に遡る可能性がある。

2) 2区

第1層下面の遺構として多くの小溝を検出した(図28、図版9)。

小溝群(図28、図版9) 幅0.2～0.3m、深さ0.05m 前後の小溝群で、中央部で確認した。埋土の多くは第1層であるが、1区同様やや淡い色調のものもある。すべて南北方向であり、第2層段階とは方位が異なっている。溝の機能としては、第1層あるいはそれ以前の耕起に関する鋤溝である。

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片であり、直接時期を決する資料はない。小溝群の時期は、1区の小溝群同様、江戸時代以降、昭和30年代前半までであろう。

3) 3区

3区では、遺構は検出されなかった。府営住宅建設もしくは解体時に削平を受けたためであろう。

4)江戸時代以降の土地利用について

1・2区において小溝群が確認された。これらについては耕作に関係するものであり、調査地は府営住宅建設時まで耕作地として利用されていたといえよう。前段階との間である15～16世紀代の様相については、確実な遺構・遺物ともに検出されていないため不明とせざるを得ないが、空白地であったとは考えにくい。その前後の時期が耕作地として利用されていること、逆に明確な遺構が確認できないことから、地面に深い痕跡を残さないような土地利用であったことが推定され、やはり耕作地であった蓋然性が高いといえよう。

第Ⅳ章 調査成果のまとめ

苧田9丁目所在遺跡での初めての調査となる今回の調査によって、これまで不明であった同遺跡の実態の一部が明らかになった。ここでは、今回の調査成果を踏まえて、調査地の変遷を記すことによりまとめとする。

平安時代以前 今回の調査では、地山の残りがよい部分を対象として旧石器時代の遺物を求めるべく調査を行ったが、出土しなかった。今回、予測した調査地の東西にある谷は、旧石器時代には存在していると思われる。谷を控えた好地形であり、西の山之内遺跡でも旧石器時代の遺物が認められていることから、今後の調査の進展によって検出される可能性はあろう。

縄文～奈良時代の遺構についても検出することができなかった。ただし、検出した自然の傾斜に近い方位の振る溝は、少なくとも平安時代以前に遡る可能性がある。

古墳時代以降、古代については、周辺の歴史的環境からは当地は重要な場所であったといえる。つまり、南東に屯倉と推定される依網池を控え、東には難波大道を控えている。調査地は地形的にも高く、好条件を有しているにも係らず、今回の調査では顕著な遺構が検出できなかった。第Ⅲ章第2節でも推定したように、両側にある谷の存在によって利用できる平坦面が少ないため、積極的に活用されなかった可能性もあろう。削平によるものか、本来存在しなかったのかは、現在のところ判断できる材料に乏しく、今後の調査に期待したい。

平安時代には、南北方向の溝の存在や、第3層に含まれる一定量の遺物の存在から、調査地は耕作地として利用されたとみられる。これ以降、遺構は南北方向を指向することから条里制にもとづいた広範囲におよぶ開発が行われたのであろう。

鎌倉～室町時代 2時期の遺構面を確認した。ともに多くの小溝群が検出され、調査地は引き続き耕作地として利用されていたことがわかる。北東の苧田4丁目所在遺跡では、14～15世紀代の鑄造に関係する遺構・遺物が検出されている。調査地が含まれる耕作域で実際に作業した集団については不明であるが、遺物の存在から近隣に集落があったことが推定しうる。今後の調査によって、集落と生産域、手工業地域という当時の集落のようすが復元できるかもしれない。

江戸時代以降 前段階同様に小溝群が検出され、府営住宅建設の昭和30年代前半まで、耕作地として利用されている。東西方向の大規模な溝は耕作に必要な導排水のほか、区画の意味もあったのであろう。

以上、簡単ではあるが今回の調査成果を記した。当遺跡における調査は始まったばかりであり、不

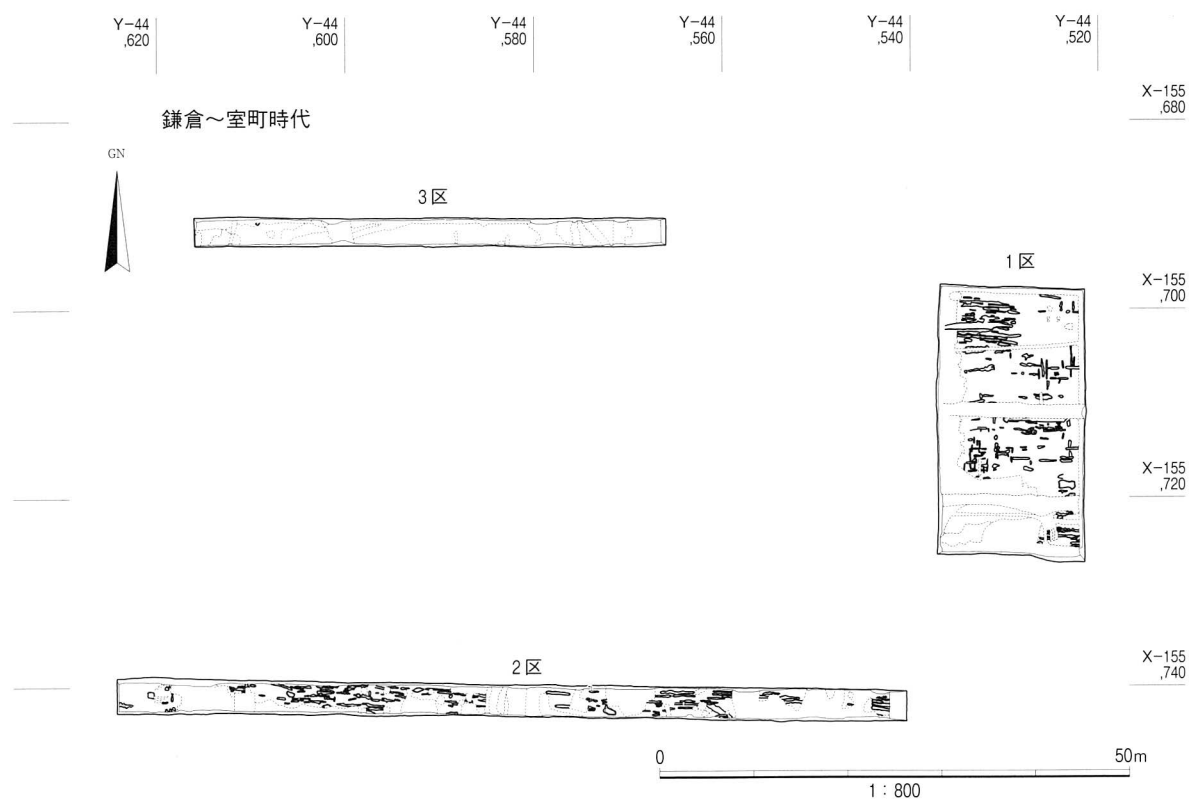
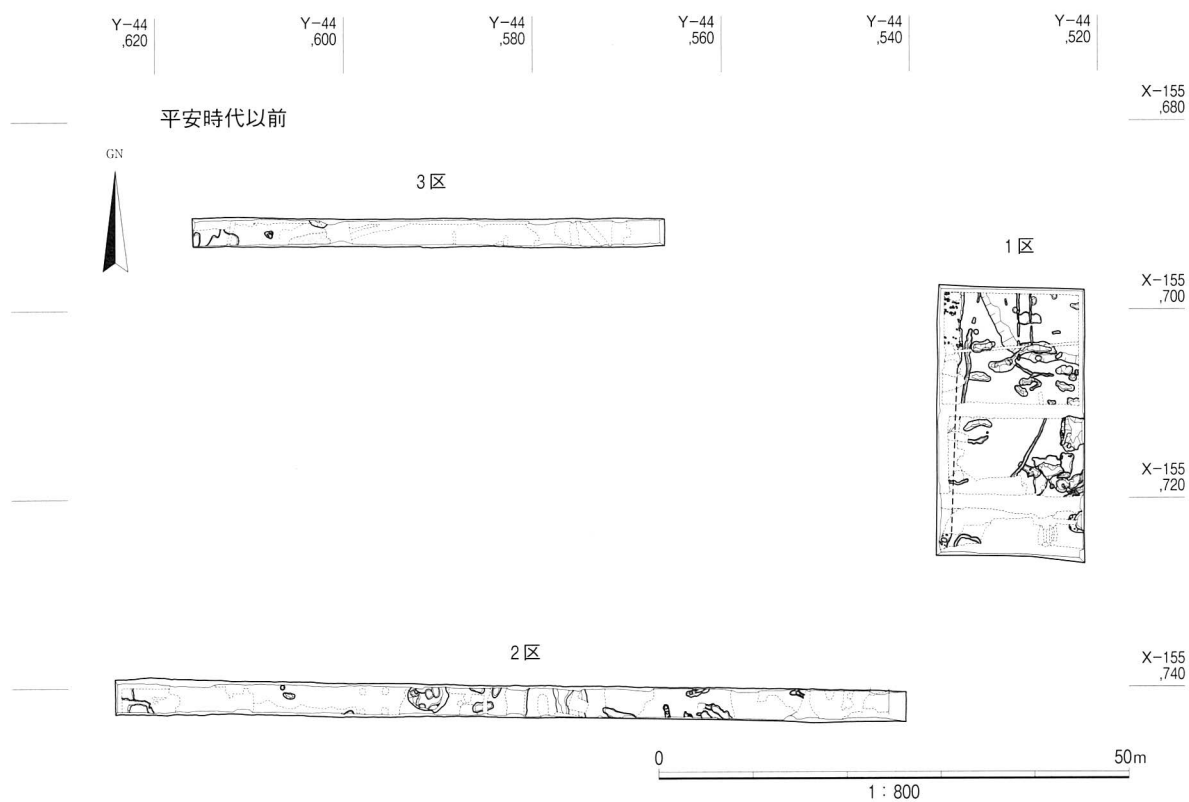


図31-1 調査地の変遷(1)

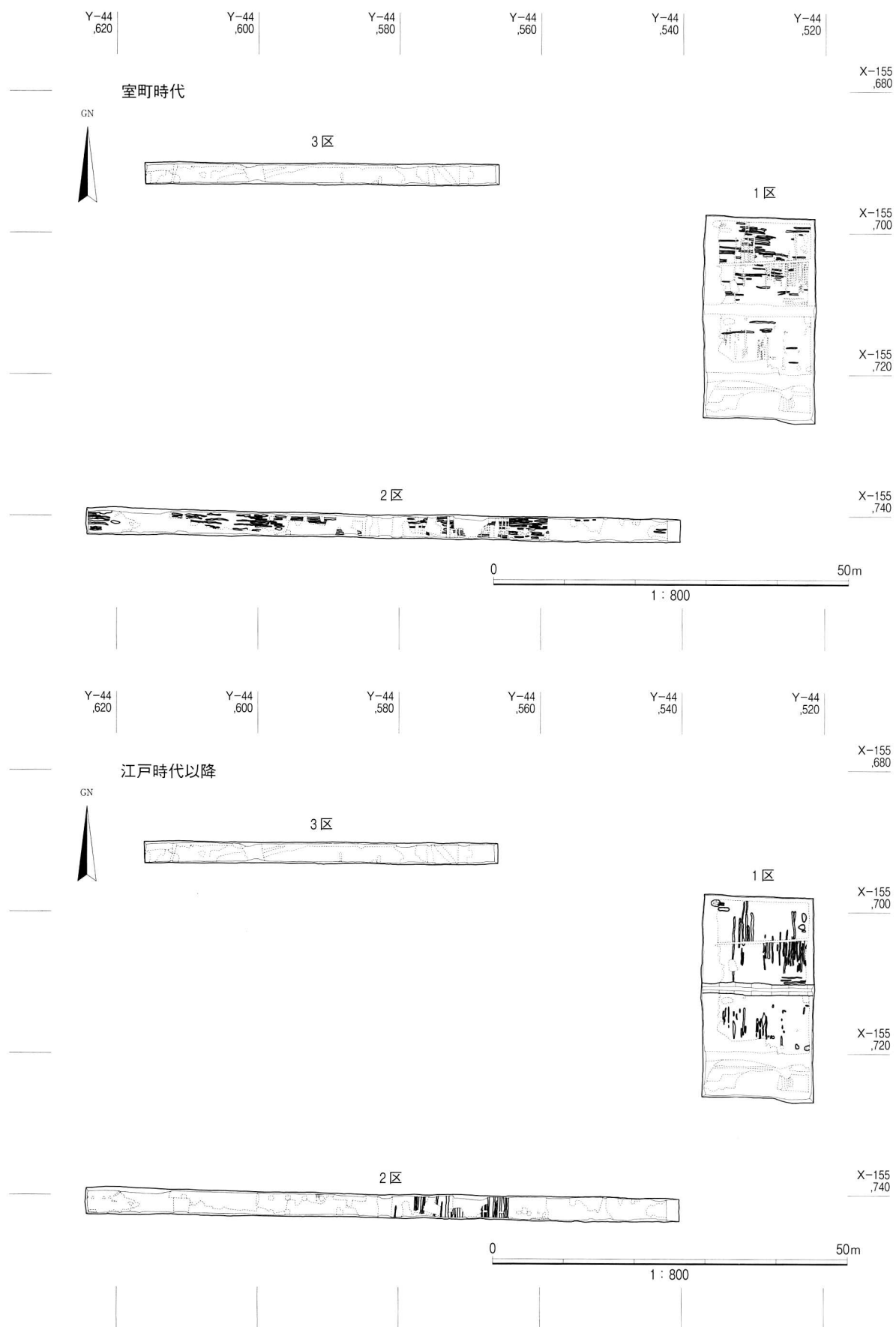


図31-2 調査地の変遷(2)

明な点の方が多く残されている。今後の課題としては、まず、各時期の景観の復元があげられる。とくに今回東西に想定した谷が存在するのかが、その後の開発とも関係し、大きな課題としてあげられよう。また、平安時代以前の土地利用のようすについても今回の調査では不明な点として残されている。古代において重要な場である当地がどのような土地利用をなされていたのかも、重要な課題であろう。中世においては、耕作地の経営主体として東北の荏田および西南の我孫子集落との関係も注目される。

荏田9丁目遺跡の実態や周囲の遺跡との関係を考えるに当たっては、より多くの調査の積み重ねが必要であり、今後の調査に期待したい。

引用・参考文献

- 石神怡1983、「住吉大社境内採集石器について」：『大阪の歴史』第10号 大阪市史編纂所、pp.58-61
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1989、「生田邸建設工事に伴う津守廃寺遺跡発掘調査(TM87-3)略報」：『昭和62年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.173-187
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1994、「北村邸建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM93-33)略報」：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87-95
- 大阪市史編纂委員会1989、『新修 大阪市史』第二卷
- 大阪市文化財協会1998a、『山之内遺跡発掘調査報告』
- 1998b、『南住吉遺跡発掘調査報告』
- 1999、『山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2004a、『南住吉遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 2004b、『莊嚴浄土寺境内遺跡発掘調査報告』
- 2004c、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』
- 2008、『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2009、『遠里小野遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 大阪府教育委員会1995、『大和川今池遺跡発掘調査概要』Ⅺ
- 大阪府文化財センター2008、『難波大道の調査』：都市計画道路大和川線建設に伴う大和川今池遺跡発掘調査現地説明会資料
- 小田木富慈美2007、「いづくにや去らん～「かつた村」の鋳物師たち～」：大阪市文化財協会編『葦火』127号、pp.4-5
- 小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帖』17版 日本色研事業株式会社
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 田中清美2008、「遠里小野遺跡から見つかった複弁七弁蓮華文軒丸瓦と榎津廃寺」：大阪市文化財協会編『葦火』136号、pp.1-3
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 2008、「古大阪平野の景観」：大阪市文化財協会編『大阪遺跡』、pp.20-21、創元社
- 坪井良平1970、『日本の梵鐘』 角川書店
- 名古屋大学文学部国史研究室1982、『中世鋳物師史料』 法政大学出版局
- 松尾信裕2005、「帆立貝形前方後円墳を発見！」：大阪市文化財協会編『葦火』115号、pp.4-5
- 村元健一2004、「苅田の鋳物師と山之内遺跡の鋳造関連遺構」：大阪市文化財協会編『苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告』、pp.54-58
- 大和川・今池調査会1981、『大和川・今池遺跡』Ⅲ

あ　と　が　き

荏田9丁目所在遺跡における発掘調査は、今回が初めてのことであった。調査の成果としては、中世以降耕作地として利用されてきたことが判明し、それ以前においても、この地が、地勢的にも重要な地点であったことをうかがわせる資料を得ることができた。

現代の我々が生活する町がさまざまな場の集まりとして構成されるように、当時の遺跡も、いくつかの場から成り立っているのである。1つの発掘調査において遺跡のすべてがわかることはない。今回の調査は解明のための第一歩であり、調査の積み重ねにより、今回の調査成果の意味や周辺遺跡との関係が明らかになっていくであろう。

発掘調査で求めるのは、当時の土地利用や生活の実態を正確に復元することである。そのためには、今後も精度の高い調査を行い、その成果を忠実に市民に還元していくことが我々の責務と考える。

(趙哲済)

索引

- う 上町台地 …… 1, 2, 3, 5
- お 落込み …… 14, 21, 25, 27
遠里小野遺跡 …… 3, 4
- か 瓦器 …… 9, 13, 14, 29, 34, 35, 36, 39
 苅田9丁目所在遺跡 …… 1, 2, 3, 7, 41, 44
 苅田4丁目所在遺跡 …… 5, 6, 7, 41
- こ 黒色土器 …… 23, 29, 34
- し 小溝 …… 14, 29, 34, 35, 36, 39, 40, 41
 莊嚴浄土寺境内遺跡 …… 4, 5
- す 須恵器 …… 9, 13, 20, 23, 29, 34, 35, 36, 39
 住吉大社境内遺跡 …… 3, 4
- た 谷 …… 2, 14, 27, 40, 44
- つ 津守廃寺 …… 4
- と 陶磁器 …… 36, 39
 倒木痕 …… 14, 17, 21, 23, 25, 27
 土壙 …… 3, 5, 14, 17, 20, 23, 27, 29, 34, 36
- な 難波大道跡 …… 3, 41
- は 土師器 …… 9, 13, 14, 20, 21, 23, 29, 34, 35, 36, 38
- み 溝 …… 4, 5, 6, 14, 16, 17, 21, 23, 27, 28, 29, 34, 35, 36, 39
 南住吉遺跡 …… 3, 4
- や 大和川今池遺跡 …… 3
 山之内遺跡 …… 1, 3, 4, 5, 41
- よ 依網池 …… 1, 2, 3, 5, 14, 27, 41

**Archaeological Report
of the
Karita 9-chome Site
in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Karita Prefectural Apartmenthouse

March 2009

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text.

SD: Ditch

SK: Pit

SX: Other features-

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Site Location and Preceding Investigations	1
1) Site Location	1
2) Historical Background and Preceding Investigations	3
Chapter II Background and Progress of Reserch	7
1) Background of Reserch	7
2) Progress of Reserch	8
Chapter III Investigation Results	9
S.1 Stratigraphy	9
S.2 Features and Remains until the Heian Periods	14
1) Features and Remains at area 1	14
2) Features and Remains at area 2	21
3) Features and Remains at area 3	25
4) Land Use until the Heian Periods	27
S.3 Features and Remains from the Kamakura to the Muromachi Periods	29
1) Features and Remains of bed 3	29
2) Features and Remains of bed 2	34
3) Land Use from the Kamakura to the Muromachi Periods	35
S.4 Features and Remains of the Edo Periods and later	36
1) Features and Remains at area 1	36
2) Features and Remains at area 2	39
3) Features and Remains at area 3	39
4) Land Use at the Edo Periods and later	40
Chapter IV Investigation Results	41
References and Bibliography	45
Postscript and Index	
English Contents	

報 告 書 抄 録

ふりがな		かりた9ちょうめしよざいいせきはつつちようさほうこく						
書名		荊田9丁目所在遺跡発掘調査報告						
編著者名		平田洋司						
編集機関		財団法人 大阪市文化財協会						
所在地		〒540-0006 大阪府中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833						
発行年月日		西暦 2009年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かりた9ちょうめ 荊田9丁目 しよざいいせき 所在遺跡	おおさかしすみよしく 大阪府住吉区 かりた9ちょうめ 荊田9丁目	27120	-	34° 35′ 30″	135° 31′ 00″	20080512 ～ 20080725	869㎡	大阪府営荊田住宅建替建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
荊田9丁目 所在遺跡	集落	平安時代		溝・落込み・土壇		土師器・須恵器・瓦器		
		鎌倉～室町時代		小溝群・土壇		土師器・須恵器・瓦器		
		江戸時代		小溝群・溝・土壇		土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器		
要約		<p>本書は、荊田9丁目所在遺跡で初めて行った発掘調査の成果を報告するものである。平安時代以前では、溝や土壇のほか、谷地形の存在を予測させる落込みや多数の倒木痕・根痕が検出された。溝は地形に沿ったものと正方位を指向するものがあり、遅くとも平安時代には条里制にもとづく開発が行われたことを示唆する。</p> <p>鎌倉～室町時代では、耕作に係する小溝群が多数検出され、調査地は耕作地として利用されていたことが判明した。</p> <p>江戸時代以降についても、耕作に係する小溝群が多数検出され、現代に至るまで引き続き耕作地として利用されてきたといえる。</p>						

図 版

調査地全景
(南西から)



1区 北壁地層断面
(南西から)



2区 北壁地層断面
(中央付近・南西から)





1区 第3層基底面・
第5層上面の状況
(北から)



1区 第3層基底面・
第5層上面の状況
(南から)



1区 SD101
(北から)

1区 SD103・104
(北から)



1区 SK101
(西から)



1区 SX103・104
(北から)





1区 SX111
(東から)



1区 SX113
(南西から)



2区 第3層基底面・
第5層上面の状況
(西から)

2区 SX201
（北東から）



2区 SD201
（南東から）

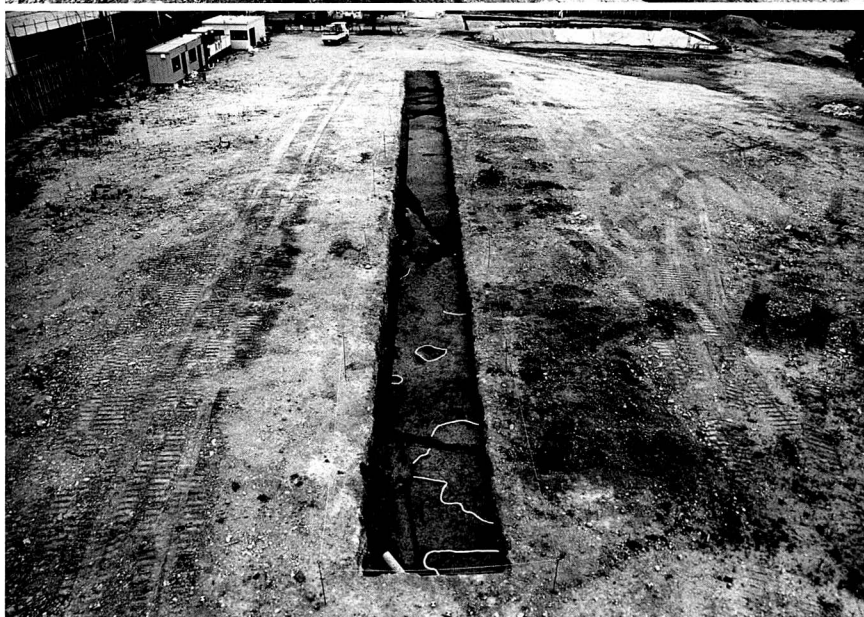


2区 SX204
（南東から）





2区 SX207
(北西から)

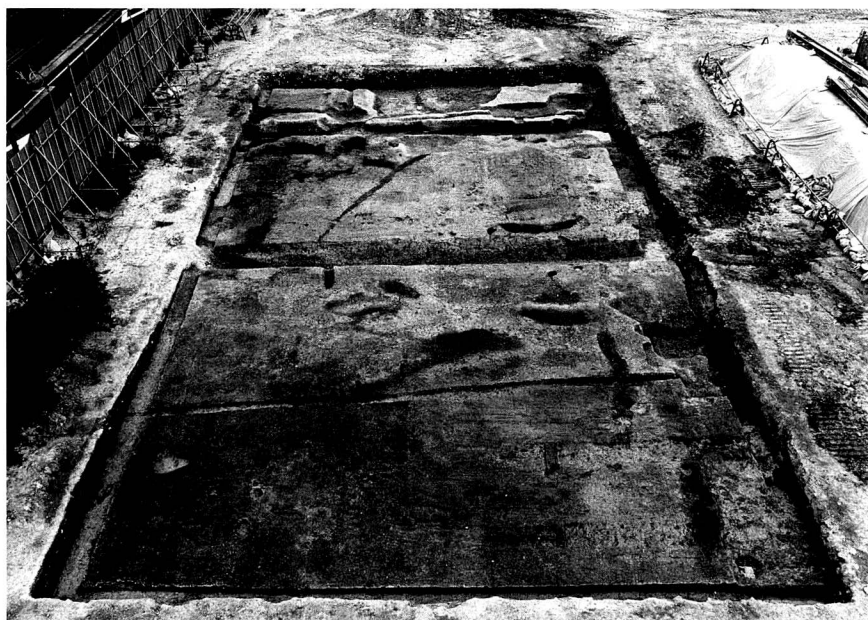


3区 第0層基底面・
第5層上面の状況
(西から)



3区 SX301・302
(北東から)

1区 第3層下面
の状況
（北から）

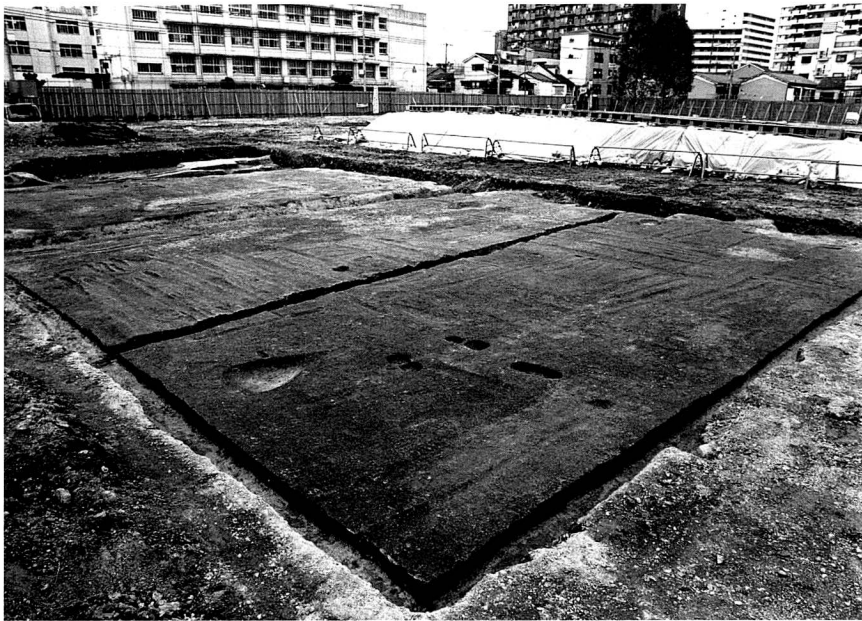


2区 第3層下面
の状況
（西から）



1区 第1層下面・
基底面の状況
（北から）

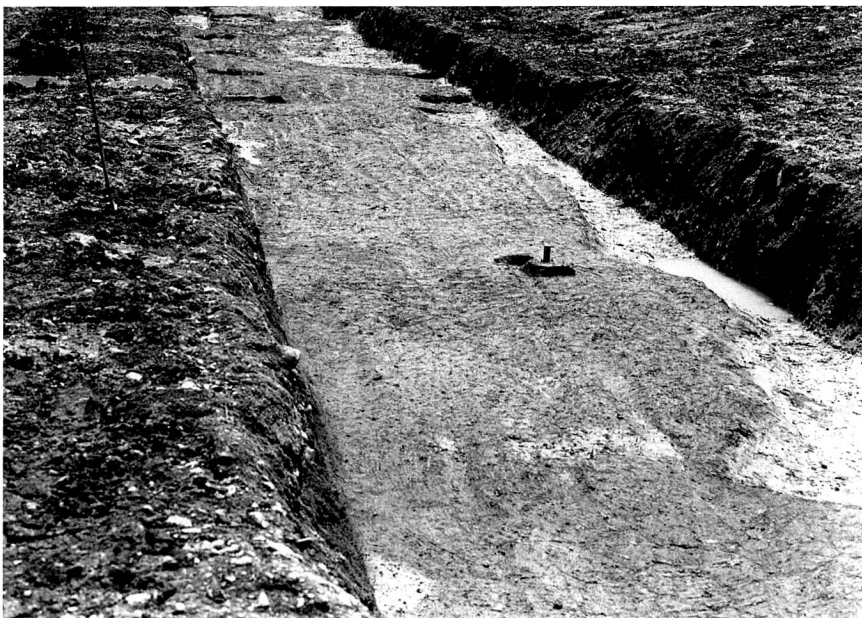




2区 第1層下面・
基底面の状況
(北東から)



2区 第2層下面
の状況
(西から)

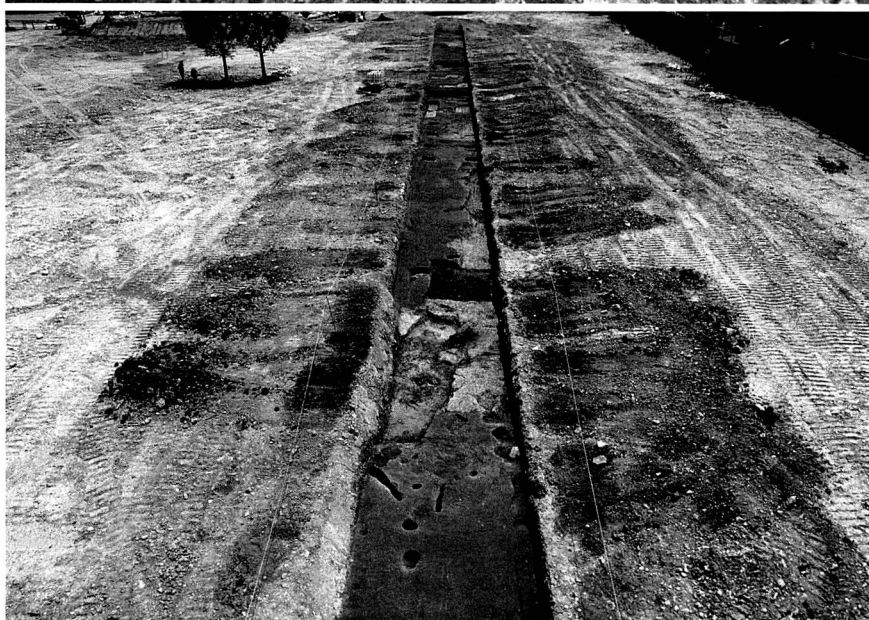


2区 第2層下面
小溝群
(西から)

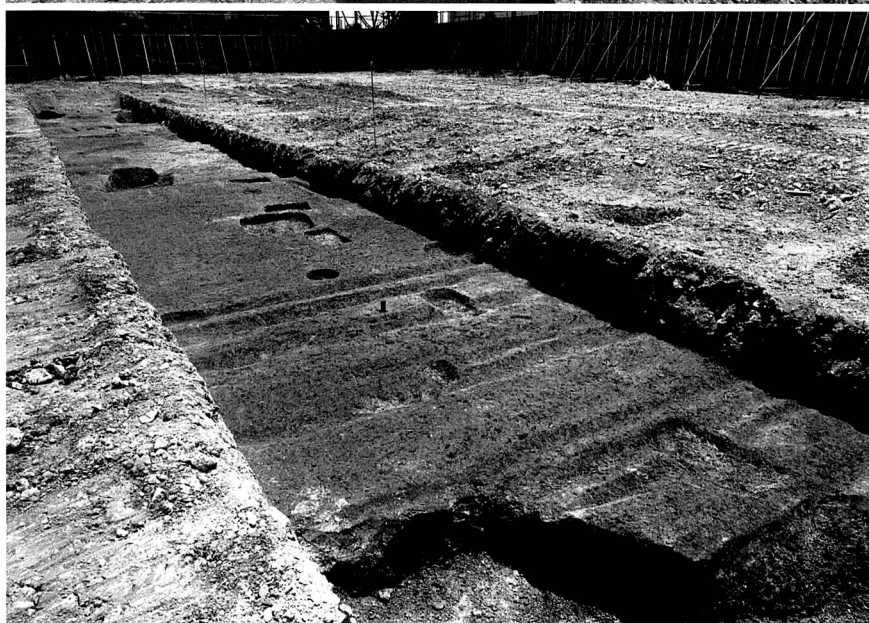
1区 SK104
(南から)



2区 第1層下面
の状況
(西から)



2区 第1層下面
小溝群
(北西から)





2



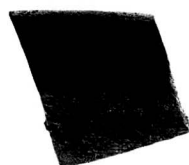
14



5



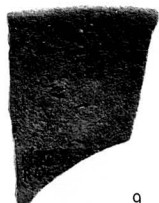
15



16



6



9



8



17



7



10



12



13



19



20



11



18



21

1区SX114・115検出中(2)、2区SD202(5・6)、1区第3層下面小溝群(7)、1区第3層(8～10)
2区第3層下面小溝群(11～14)、2区第3層(15・16)、1区SK104(17)、1区SD106(18～21)

大阪市住吉区 荻田 9 丁目所在遺跡発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-013-6

2009年 3 月31日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1 - 1 - 35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0041 大阪市中央区北浜 2 - 1 - 14

**Archaeological Report
of the
Karita 9-chome Site
in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Karita Prefectural Apartmenthouse

March 2009

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Karita 9-chome Site
in Osaka, Japan**

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
the Karita Prefectural Apartmenthouse

March 2009

Osaka City Cultural Properties Association